

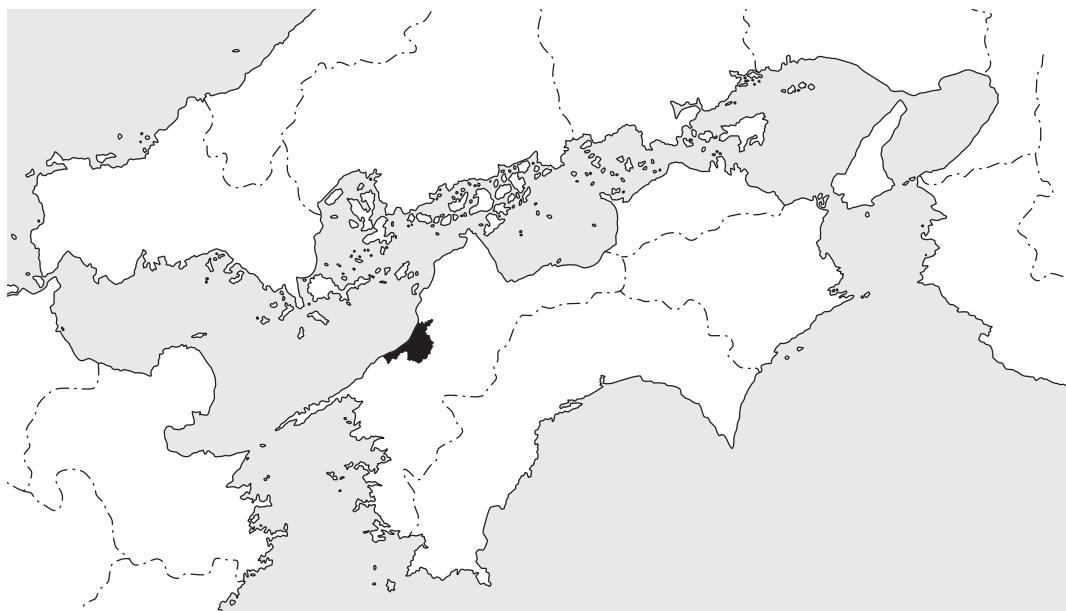
伊予市内遺跡詳細分布調査報告書V

—平成29・30年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書—

2024年3月
愛媛県伊予市教育委員会

伊予市内遺跡詳細分布調査報告書V

—平成29・30年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書—



2024年3月
愛媛県伊予市教育委員会

序 文

令和3年度末まで伊予市単独事業として実施してまいりました伊予市内遺跡詳細分布調査のうち、平成29・30年度の成果を報告いたします。

平成29年度には伊予市遺跡詳細分布調査委員会に新しい委員をお迎えし、新体制で事業に取り組みました。平成30年度には、地元住民の方々にも加わっていただいて、踏査を実施することができました。

貴重な国民的財産である市内の埋蔵文化財を守るため、今後も調査、保護、啓発に努める所存です。

本事業を進めるにあたりご協力をいただききました関係諸機関や市民の皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

令和6年3月15日

伊予市教育委員会
教育長 上岡 孝

例　　言

1. 本報告書は、伊予市教育委員会が平成29・30年度に実施した、伊予市内遺跡詳細分布調査の成果報告書である。
2. 位置図は、縮尺1:2,500または1:5,000の伊予市全図(国際航業株式会社調整 平成27年3月測図)を用いた。
3. 図1(伊予市周辺地形概要図)は、愛媛県伊予市全図(国土地理院発行の5万分の1地形図をもとに伊予市複製)をトレースして作成した。断層の位置と沖積低地堆積物の範囲は、昭和49年愛媛県発行の表層地質図(『表層地質図 郡中 5万分の1』『表層地質図 松山南部 5万分の1』)をもとにした。本文中の遺跡立地は、昭和49年愛媛県発行の地形分類図および表層地質図(郡中・大洲・松山南部)をもとに記載した。
4. 土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」(2014年度版)による。
5. 本報告書で使用する包蔵地番号は、国庫補助事業により整理した伊予市埋蔵文化財包蔵地調査カードの番号である。平成29・30年度時点で包蔵地調査カードを作成していなかった調査地は、その旨を明記したうえで令和5年4月1日現在の番号を記載する。
6. 本文中、文化財保護法第93条における周知の埋蔵文化財包蔵地は「包蔵地」、埋蔵文化財包蔵地調査カードは「包蔵地調査カード」と省略する。
7. 近世・近代の出土物の埋蔵文化財としての扱いについての判断は、愛媛県教育委員会の平成12年3月30日付「開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱い基準」による。
8. 伊予市内を3地域に区分し、市町村合併前の伊予市を伊予地域、伊予郡中山町を中山地域、伊予郡双海町を双海地域とした。
9. 本報告書の執筆と編集は、島崎達也が担当した。
10. 調査成果のうち、伊予市所蔵の銅鏡の所見は岩本崇氏(島根大学)に、近世木樋の所見は遠部慎氏(中央大学人文科学研究所)と松田凌馬氏(安芸考古学会)に依頼した。黒曜石の螢光X線分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

11. 平成29年度に伊予市教育委員会が実施した試掘調査のうち、尾崎大人池遺跡は、高橋二葉と武智克弥が同年度に作成した試掘調査報告書の内容をもとに執筆した。三島焼窯跡群の近接地は、島崎達也が令和2年度に作成した試掘調査報告書の内容をもとに執筆した。
12. 平成29年度の三島焼窯跡群の近接地の試掘調査では、村上伸之氏(有田町歴史民俗資料館)、石岡ひとみ委員、愛媛県教育委員会事務局管理部文化財保護課埋蔵文化財係の皆様に現地指導を依頼した。加えて、外部専門家から調査指導を得た。土層断面概念図と層位の記録は多田仁氏、平面図は井上隆文氏の協力を得て作成した。
13. 平成30年度の尾崎大人池遺跡の試掘調査では、三吉秀充委員、岡田敏彦委員、門田眞一委員、遠部慎氏、愛媛県教育委員会事務局管理部文化財保護課より、現地調査や不時発見への対応について助言、指導いただいたほか、遺構遺物に対する所見をいただいた。
14. 遺物実測図と拓本の作成、トレース作業は島崎達也が担当した。
15. 平成29年度採集・出土遺物の水洗と注記は、影浦さおりと川留尚美が実施した。一部は令和2年度に公益社団法人伊予市シルバー人材センターに委託したほか、令和4年度に島崎達也と矢野真人が実施した。
16. 平成30年度採集・出土遺物の水洗と注記は、平成30年度は島崎達也が、令和4年度は島崎達也と矢野真人が実施した。
17. 遺物実測図の縮尺は、1/2または1/3とした。俯瞰撮影した遺物写真の縮尺は、1/1、1/2または1/3とした。
18. 平成29年度の踏査および試掘調査時の写真は、高橋二葉と武智克弥が撮影した。遺物の写真は島崎達也が撮影した。
19. 平成30年度の踏査および試掘調査時の写真、遺物の写真は島崎達也が撮影した。
20. 調査に関わる記録などおよび出土遺物は伊予市教育委員会が保管している。
21. 平成29、30年度当時の伊予市遺跡詳細分布調査委員会の委員に本報告書の内容を確認していただいた。伊予市遺跡詳細分布調査委員会は令和3年度末を以って解散したため、令和5年度第1回伊予市文化財保護審議会において、委員の皆様から、本報告書の内容について助言を受けた。

22. 整理作業において、令和4年度に石貫弘泰氏と沖野実氏(公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター)より遺物について所見をいただいたほか、令和5年度には本報告書の内容について助言を受けた。上吾川採集の瓦器椀と永木採集の土師器皿については、令和5年度に中野良一氏より所見をいただいた。

23. 現地調査や整理作業、報告書作成、文化財の取扱いにおいては、多くの方々の御協力と、御所見、御助言をいただいた。以下に記して感謝申し上げる次第である。(敬称略・五十音順)

植田好弘 岡崎直司 岡田安正 木下政利 武田淳一 土井光一郎

長井數秋 東 譲二 日和佐宣正 福住稔政 正岡千博 松浦弘正

松本安紀彦 峯本洋史 宮岡ケイ子 森本泰隆 山口テル子 山下 博

柚山俊夫 吉田 広

伊予市歴史文化の会 中山史談会 愛媛県教育委員会事務局管理部文化財保護課

愛媛県中予地方局 愛媛県立伊予農業高等学校 愛媛県歴史文化博物館

公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター

本文目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の体制	1
第3節 事業計画	2
第4節 調査の方法	3
第2章 調査地域の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 平成29・30年度調査の概要	7
第1節 平成29年度調査	10
(1) 現地踏査・現地確認の成果	10
(2) 試掘調査・確認調査の成果	13
第2節 平成30年度調査	20
(1) 現地踏査・現地確認の成果	20
(2) 聞き取り調査の成果	31
(3) 試掘調査・確認調査の成果	32
(4) 工事立会の成果	42
第4章 まとめ	46
付 編	
1 伊予市上三谷猿ヶ谷古墳群採集の具鏡とその歴史的意義(岩本崇)	54
2 伊予市内出土黒曜石の産地推定(パリノ・サーヴェイ株式会社)	60
3 中予地方における近世木樋遺構と炭素14年代測定 —伊予市尾崎出土の木樋の年代測定結果—(遠部慎・松田凌馬)	67

挿 図 目 次

図1	伊予市周辺地形概要図	4	図17	永木地区調査地位置図	25
図2	調査遺跡位置図	9	図18	藤繩之森カド遺跡採集遺物	27
図3	尾崎周辺平成29年度調査地位置図	10	図19	福住古墓塚調査地位置図	28
図4	大人池採集遺物(平成29年度発見届提出)	10	図20	下吾川地区調査地位置図	29
図5	尾崎上林遺跡採集遺物 (平成29年度発見届提出)	11	図21	犬寄遺跡調査地位置図	30
図6	上吾川八幡池遺跡採集遺物	11	図22	猿ヶ谷1号墳・猿ヶ谷2号墳 銅鏡採集地点位置図	31
図7	内台遺跡周辺位置図	12	図23	下吾川新池遺跡調査区トレンド配置図	32
図8	内台遺跡出土遺物 (平成29年度発見届提出)	12	図24	下吾川新池遺跡土層柱状図	32
図9	尾崎大人池遺跡調査区トレンド配置図	13	図25	伊予小学校遺跡調査区位置図	33
図10	三島焼窯跡群の近接地調査区 トレンド配置図	17	図26	伊予小学校遺跡調査区トレンド配置図	34
図11	三島焼窯跡群の近接地土層断面概念図	18	図27	伊予小学校遺跡土層柱状図	34
図12	高見Ⅱ遺跡・東峰遺跡第4地点 調査地位置図	20	図28	伊予小学校遺跡出土遺物	35
図13	高見Ⅱ遺跡採集遺物	21	図29	尾崎大人池遺跡平成30年度調査区 平面略図	37
図14	平岡周辺調査地位置図	22	図30	尾崎大人池遺跡土層断面図	38
図15	尾崎周辺平成30年度調査地位置図	23	図31	尾崎大人池遺跡採集遺物1	40
図16	大人池平成30年度採集遺物	24	図32	尾崎大人池遺跡採集遺物2	41
			図33	大人池和釣	43
			図34	大人池近世木樋平面図	44
			図35	大人池近世木樋の構造模式図	44

挿 表 目 次

表1	伊予市遺跡詳細分布調査委員会 (平成29・30年度)	1	表5	平成30年度調査地一覧	7,8
表2	伊予市教育委員会事務局	2	表6	新たに包蔵地調査カードを作成した遺跡	47
表3	平成30年度の踏査計画	2	表7	掲載遺物一覧(土器)	50-52
表4	平成29年度調査地一覧	7	表8	掲載遺物一覧(石器)	53
			表9	掲載遺物一覧(金属製品)	53

写 真 目 次

写真1	T-1北壁土層断面	13	写真25	石塚(一号墳)(南西より)	26
写真2	T-2西壁土層断面	13	写真26	二号墳とされた箇所(西より)	26
写真3	T-3北壁土層断面	14	写真27	二号墳調査風景	26
写真4	T-4北壁土層断面	14	写真28	藤繩之森カド遺跡採集遺物	27
写真5	T-5北壁土層断面	14	写真29	御旅山五輪塔群(南西より)	27
写真6	T-6北壁土層断面	14	写真30	調査風景	27
写真7	T-7北壁土層断面	14	写真31	石塚(南西より)	28
写真8	T-8南壁土層断面	14	写真32	福住五輪塔群(北より)	28
写真9	T-9東壁土層断面	15	写真33	犬寄遺跡採集遺物	30
写真10	T-10東壁土層断面	15	写真34	トレンチ3北壁西端	32
写真11	T-11南壁土層断面	15	写真35	トレンチ1東壁	34
写真12	T-12西壁土層断面	15	写真36	トレンチ2南壁	34
写真13	T-13南壁土層断面	15	写真37	尾崎大人池遺跡土層断面	38
写真14	T-14南壁土層断面	15	写真38	本調査区全景(北より)	39
写真15	調査区全景(A-E区を南東より)	17	写真39	SI-1検出状況(南より)	39
写真16	A-E区調査風景(北西より)	17	写真40	SI-2検出状況(北より)	39
写真17	F区調査風景(東より)	17	写真41	SI-3検出状況(南より)	39
写真18	I区(左手前)調査風景(南西より)	17	写真42	SD-1検出状況(北東より)	39
写真19	三島焼窯跡群の近接地出土遺物1 (縮尺任意)	19	写真43	不明遺構と植栽痕(北西より)	39
写真20	三島焼窯跡群の近接地出土遺物2 (縮尺任意)	19	写真44	尾崎大人池遺跡採集遺物	41
写真21	高見Ⅱ遺跡・東峰遺跡第4地点採集遺物 (平成29・30年度)	21	写真45	取水口遠景(6月8日)(北東より)	45
写真22	一字一石経塚(南東より)	22	写真46	木樋検出状況(6月15日)(南より)	45
写真23	五輪塔(南東より)	22	写真47	木樋検出状況(6月15日)(西より)	45
写真24	石塚(一号墳)頂部付近南面の石材 (南より)	26	写真48	2本目木樋の北端部(6月15日) (北西より)	45
			写真49	堤体西側断面(6月27日)(東より)	45
			写真50	4本目木樋の南端部(6月27日) (南東より)	45

付編1の図表目次

図1	猿ヶ谷古墳群採集の鏡	54
図2	銘帯対置式神獣鏡の変遷(縮尺不同)	55
図3	古墳出土の江南の鏡(縮尺不同)	57

付編2の図表目次

図1	黒曜石産地一覧	61	表1	黒曜石原産地試料一覧	62
図2	黒曜石産地推定結果(1)	64	表2	スペクトル強度と判別指標値	66
図3	黒曜石産地推定結果(2)	65	表3	黒曜石判定結果	66

付編3の図表目次

図1	菅木新池発見木樋 (左：発見時 右：取り上げ時)	67	表1	サンプリング及び実験を行った試料	73
図2	見奈良発見木樋	67	表2	測定した資料の ¹⁴ C炭素年代と曆年較正年代 (calBC)	74
図3	赤蔵ヶ池木樋(略測図：竹内編2002)	69	表3	伊予市内の炭素 ¹⁴ 年代測定例	75
図4	赤蔵ヶ池発見鉄釘実測図	69			
図5	様々なな和釘(安田1916)	70			
図6	釘形状分類(白鷗1997)	70			
図7	木樋の分類(竹内2009)	70			
図8	中予地方における中世の木樋 (別府遺跡：作田2020)	71			
図9	生材の顕微鏡写真	72			
図10	大人池測定資料の較正曲線	75			

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と経過

平成27年度以降、伊予市教育委員会(以下、「伊予市教委」と称する。)は市単独事業として伊予市内遺跡発掘調査事業を実施している。平成29・30年度の主な内容は、文化財保護法第93、94条に基づく試掘調査と、同第97条に基づく不時発見への対応である。

平成30年4月、愛媛県教育委員会より、包蔵地調査カードの内容について指摘があった。要約すると以下の通りである。

- ① 包蔵地調査カード記載の所在地は、地番単位で全て記載すること。
- ② 包蔵地として保護する根拠を明記し、包蔵地調査カードには可能な限り空欄を残さないこと。
- ③ 既に消滅している遺跡に包蔵地として法的規制をかけることはできない。調査済みの地点は、過去に記録調査等を行った場所として記録すること。

これらの指摘を受け、文化財保護法第95条に基づいて包蔵地の周知を徹底し、包蔵地を適切に保護するため、包蔵地調査カードの見直しと、過去の調査成果の整理が課題となった。

さらに、行政と地元住民の協働による踏査が遺跡詳細分布調査の中心であるとの考えにより、伊予市遺跡詳細分布調査委員会と市民の協力を得た踏査を計画した。また、外部専門家による伊予市教委保管の考古資料の評価を試みた。

第2節 調査の体制

平成29・30年度の調査体制および、令和5年度の報告書作成の体制は、次のとおりである。

表1 伊予市遺跡詳細分布調査委員会(平成29・30年度)

	氏名	所属(当時)
委員長	三吉秀充	愛媛大学先端研究・学術推進機構 埋蔵文化財調査室
委員	石岡ひとみ	愛媛県教育委員会事務局管理部文化財保護課
委員	岡田敏彦	公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
委員	門田眞一	伊予市文化財保護審議会

オブザーバー；愛媛県教育委員会事務局管理部文化財保護課

表2 伊予市教育委員会事務局

	平成29年度	平成30年度	令和5年度
教育長	渡邊博隆	渡邊博隆	上岡 孝
教育監理監	井上伸弥	井上伸弥	—
事務局長	齋岡正直	齋岡正直	窪田春樹
社会教育課長	森田誠司	山岡慎司	岡市裕二(8月まで) 小笠原幸男(10月から)
課長補佐	北岡康平	北岡康平	堀内和美
係長	—	—	福積和富
主査	高橋二葉	—	—
主任	武智克弥	武智克弥	—
主事	—	相原知奈美	—
文化財専門員	—	島崎達也	島崎達也
文化財整理指導員	沖野新一	—	—
文化財アドバイザー	—	沖野新一(上半期)	—
臨時職員	—	松本美香	—
会計年度任用職員	—	—	松本美香

第3節 事業計画

平成29年度は、双海地域、伊予地域の踏査を計画した。平成29年11月2日(木)に、第1回伊予市遺跡詳細分布調査委員会を開催して、平成29年度の調査計画を提示し、平成30年3月7日(水)の第2回伊予市遺跡詳細分布調査委員会にて成果を報告した。

平成30年度は、調査計画を練り直すとともに、伊予市全域を調査対象として踏査等を行い、実態の把握に努めることとした。平成30年5月31日(木)に、第1回伊予市遺跡詳細分布調査委員会を開催した。平成30年10月18日(木)、伊予市の文化財保護行政(埋蔵文化財等)における現状と課題、今後の方向性、取り組みについての計画設定、情報共有のため、伊予市遺跡詳細分布調査委員会委員と伊予市教委職員で意見交換会を実施した。12月には伊予市内遺跡詳細分布調査を実施し、委員、伊予市教委、土地所有者ら地元住民で現地を踏査した。平成31年3月18日(月)の第2回伊予市遺跡詳細分布調査委員会にて成果を報告した。

表3 平成30年度の踏査計画

日時	踏査内容
12月4日(火)	中山町永木地区三島神社古墳(一号墳及び二号墳)とその周辺の踏査
12月11日(火)	下吾川地区現地踏査(愛媛県立伊予農業高等学校敷地内外)

第4節 調査の方法

主な事業内容は、現地踏査、開発事業に伴う試掘調査、工事立会である。

平成29年度については、文化財整理指導員の指導を受けて伊予市教委の職員が現地踏査を担った。試掘調査については、尾崎大人池遺跡では伊予市教委の職員が単独で、三島焼窯跡群の近接地では、遺跡詳細分布調査委員会、愛媛県教育委員会事務局文化財保護課および外部専門家の指導を受けつつ、伊予市教委の職員が実施した。

平成30年度については、上半期は文化財アドバイザーの助言を受け、伊予市教委の職員が現地踏査および試掘調査を行った。下半期は、必要に応じて伊予市遺跡詳細分布調査委員会等の指導を受け、伊予市教委の職員が調査を実施した。

12月4日の永木地区踏査では、永木地区広報委員に調査への協力と周知を依頼し、土地所有者の方々への聞き取りを実施したうえで、中山史談会および伊予市歴史文化の会と協力して踏査を実施した。

12月11日の下吾川地区踏査では、愛媛県立伊予農業高等学校に協力を依頼し、教職員の方々に踏査に参加していただいた。

この他、伊予市教委職員が単独で踏査をする際にも、地元住民や広報委員に協力や周知を依頼した。

第2章 調査地域の環境

第1節 地理的環境

伊予市は、平成17年に伊予市、伊予郡中山町、伊予郡双海町の3市町が合併して成立した。愛媛県のほぼ中央部に位置し、松山平野南西部から四国山地にかけての約194km²を市域とする。北は伊予郡松前町、東は伊予郡砥部町、南は大洲市・喜多郡内子町と接する。

伊予地域の東部には標高300mから400m程度の山々が伊予断層に沿って北東—南西方向に連なる。伊予断層の北西にはゆるやかな扇状地や低位段丘が広がり、耕地として利用されている。伊予灘沿いには沖積低地が発達し、近年は松山市のベッドタウンとして宅地開発が進む。中山地域は、標高700mから900m近くに達する高い山々が連なり、その間を縫うように肱川の支流である中山川とその支流が南北に流れる。河岸段丘上や斜面地には集落が分布する。双海地域は、急峻な山々が伊予灘に迫り、狭小な沖積地や海岸段丘上に集落が点在する。上灘川沿いには、西南日本を外帶と内帯に分かつ中央構造線が東西に走る。

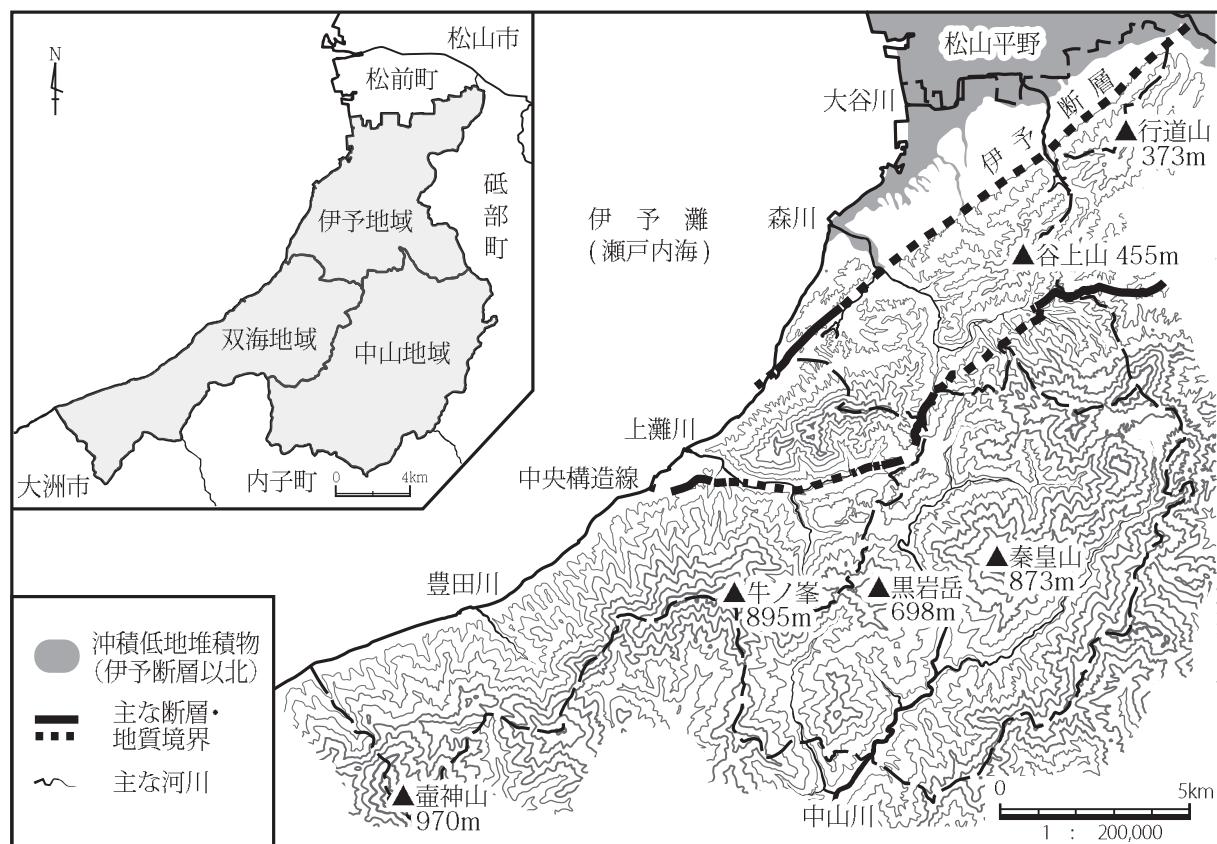


図1 伊予市周辺地形概要図

第2節 歴史的環境

後期旧石器時代

双海地域の東峰遺跡第4地点では、姶良Tn火山灰(AT: 約3万年前)の下位から、台形様石器、石核、石斧、剥片などの石器が出土した。ナイフ形石器や角錐状石器などの石器が東峰遺跡第4地点と東峰遺跡第2a地点、双海地域の高見Ⅰ遺跡、高見Ⅱ遺跡、伊予地域の三秋新池遺跡より出土している(伊予市教委2019、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下、「埋文センター」と称する。)2000,2002、公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター(以下、「埋文センター」と称する。)2018)ほか、双海地域の串本村遺跡や本郷遺跡、唐崎遺跡(沖野2009)、伊予地域の岩崎池南遺跡や征露池遺跡(長井1993)でも石器が報告されている。東峰遺跡第4地点や高見Ⅰ遺跡では礫群が検出された。平松遺跡(伊予地域)では細石核が報告されている(埋文センター1993)。

縄文時代

草創期は、伊予地域の嶺昌寺古墳にて草創期に帰属する有茎尖頭器が採集されている(得居・名本2012)。早期は、東峰遺跡第4地点(埋文センター2002)、下長沢遺跡(中山地域)(伊予市教委2015)、上吾川八幡池遺跡(伊予地域)(兵頭2019)で遺跡の報告例がある。高見Ⅰ遺跡(2次)では、落とし穴が複数報告されている(埋文センター2018)。前期は、東峰遺跡第4地点で土器が出土している。東峰遺跡第4地点、高見Ⅰ遺跡、伊予地域の各地で後期や晩期の遺跡が報告されている(伊予市教委1993、埋文センター1987、埋文センター2018)。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、伊予地域の平野部とその周辺に集中する。土器、石包丁、蛤刃石斧、有柄式磨製石剣などが各地で報告されている。平松遺跡(埋文センター1993)や上三谷篠田・鶴吉遺跡(埋文センター2018)では集落跡が報告されている。行道山遺跡は、松山平野を見下ろす行道山山頂付近に位置する中期後半から後期初頭にかけての高地性集落である(伊予市教委2005)。向山遺跡では後期前葉と推測される銅鉢(広形銅矛)が出土している。

古墳時代

古墳は伊予地域に密集する。前期古墳として嶺昌寺古墳が挙げられる。嶺昌寺古墳からは、墳丘などは確認されていないものの、京都府椿井大塚山古墳第十七号鏡と同範の三角縁獸文帶四神四獸鏡が報告されている(富田2010)。中期の古墳としては猪の窪1号墳が挙げられ、箱式石棺と多数の副葬品が確認されている(伊予市教委1981)。後期には尾崎天神下古墳や10基程度が丘陵上に密集した伊予岡古墳群(伊豫岡古墳)など、横穴式石室の円墳や方墳がみられる。遊塚古墳(埋文センター1988)や猿ヶ谷2号墳(埋文センター1998)は前方後円墳の可能性がある。終末期には大型方墳である塩塚古墳が報告されている。5世紀には市場南組窯跡で初期須恵器の生産が始まるほか、集落遺跡として池田遺跡(埋文センター2011)や蓼原遺跡(埋文センター2006)、上三谷

篠田・鶴吉遺跡(埋文センター2018b)などが挙げられる。

古代

古代の律令体制下において、伊予地域は伊予国伊予郡、中山地域・双海地域は、伊予国浮穴郡に属していたと考えられるが、詳細は不明である。平松遺跡からは刻書を有する円面硯が出土している(埋文センター1993)ほか、太郎丸遺跡(伊予市教委1993)で検出された掘立柱建物は郡衙内に建てられた建物と報告されている。八倉篠原廃寺(伊予市教委1991)など廃寺も存在し、市場かわらがはな古代窯跡群では7世紀から9世紀にかけて瓦が生産され、四重弧文軒平瓦は古泉廃寺(上吾川古泉遺跡)で使用された。伊予地域の堂ヶ谷経塚では久安6(1150)年の刻銘を有する金銅経筒が出土している。

中世

上三谷篠田・鶴吉遺跡では、鎬蓮弁文青磁碗や玉縁口縁白磁碗など貿易陶磁器が出土している(埋文センター2018b)。中山地域では、藤繩之森三島神社の石鳥居遺構に応永9(1402)年の紀年銘が認められるほか、近くの福住集落では古瀬戸の瓶子と四耳壺が出土している(正岡1968)。市内各地には中世に帰属する石造塔が多数分布する(長井・西岡2016)。室町時代になると、市内各地で山城が築かれた。伊予地域の尼ヶ古城跡では、15世紀の龍泉窯系の青磁碗や明錢(洪武通宝)、土師器皿が出土している(埋文センター2001)。

近世・近代

近世初頭の伊予地域は松山藩に、中山地域・双海地域は大洲藩に属していたが、寛永12(1635)年に領地の交換が行われ、伊予地域も御替地として大洲藩と支藩の新谷藩に帰属することとなる。伊予地域の郡中には港町が発展し、近世後期には、新谷藩の命により市場村で市場焼が生産された。明治期になると、伊予地域の三島では三島焼の生産が盛んになり、大正期には伊予陶器株式会社の操業による大量生産と海外輸出により、伊予地域の窯業は最盛期を迎えた。中山地域や双海地域では陶石が採掘され、双海地域の上灘や高野川でも窯業が行われていた。

第3章 平成29・30年度調査の概要

平成29年度の調査は、現地踏査・現地確認10箇所、試掘調査2箇所であった。平成30年度の調査は、現地踏査・現地確認20箇所、試掘調査3箇所、工事立会1箇所であった。本報告書では、このうち、包蔵地調査カードの新規作成や範囲の変更に直接関わる調査成果を中心に報告する。本報告書で詳細を記載しない調査地については、次年度以降の調査成果と合わせて順次報告していく。

表4 平成29年度調査地一覧

現地踏査・現地確認

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
163	西客池遺跡	上三谷甲3526番地	平成29年10月17日	—	遺物採集
326	尾崎上林遺跡 (天神池)	尾崎453番地	—	11	令和2年度に包蔵地調査 カード作成 過去に市職員が採集した 遺物の発見届提出
A	大人池	尾崎498番地	平成29年10月25日	10	
216	上吾川八幡池遺跡	上吾川甲494番地	平成29年11月10日・12月6日	11	
176	岩崎池東遺跡	下三谷3221番地	平成29年11月21日・26日	—	遺物採集
320	高見Ⅱ遺跡1区	双海町上灘戊525番地 外	平成30年3月2日	—	土壤サンプル採集
B	池ノ久保集会所周辺	双海町串	—	—	
304	唐崎遺跡周辺	双海町上灘	—	—	
212	内台遺跡	下吾川45番地	—	12	過去に市民が採集した遺 物の発見届提出
C	布部池	上吾川991番地	—	—	遺物の発見届提出

試掘調査・確認調査

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
325	尾崎大人池遺跡 (土取場予定地)	尾崎540番地外	平成29年9月11日	13-15	令和2年度に包蔵地調査 カード作成
250	三島焼窯跡群の近接地	米湊1384番地1・1384 番地2	平成29年11月16日・17日	16-19	

表5 平成30年度調査地一覧

現地踏査・現地確認

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
317	高見Ⅱ遺跡	双海町上灘戊525番地 外	平成30年4月3日・10月22日・ 11月7日・12月17日	20-21	高見Ⅱ遺跡は令和2年度 に包蔵地調査カード作成
320	東峰遺跡第4地点				
290	下長沢遺跡	中山町中山子401番地 1外	平成30年4月3日	—	遺物採集
D	平岡の採石場跡周辺	平岡丙668番地2外	平成30年5月18日	22-23	平岡城跡(釜野城跡)付近
220	伊予岡古墳群	上吾川甲469番地1・495 番地	平成30年7月7日・18日	—	平成30年7月豪雨対応 県指定史跡「伊豫岡古 墳」

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
63	東谷南遺跡	宮下2024番地1外	平成30年11月13日	—	遺物採集
245	山畠遺跡と土段池	稻荷甲1184番地1外	平成30年11月14日	—	
137	上三谷篠田・鶴吉遺跡	上三谷甲388番地3外	平成30年11月29日・30日	—	駐輪場建設予定地
321	永木藤繩之森三島神社遺跡	中山町中山末170番地1	平成30年12月4日 平成31年2月21日	25	令和2年度に包蔵地調査 カード作成 中山町永木地区踏査
300	藤繩之森カド遺跡	中山町中山午945番地外	〃	26-27	中山町永木地区踏査
322	福住古墓塚	中山町中山末1092番地外	〃	28	令和2年度に包蔵地調査 カード作成 中山町永木地区踏査
E	愛媛県立伊予農業高等学校の敷地	下吾川565番地3外	平成30年12月11日	29	下吾川地区踏査
222	浜田遺跡とその周辺	下吾川1456番地外	〃	30	下吾川地区踏査
A	大人池	尾崎498番地	平成30年12月17日	23-24	
325	尾崎大人池遺跡 (JR線路の東側)	尾崎555番地1	平成31年2月8日	23-24	令和2年度に包蔵地調査 カード作成 遺物採集
F	稻荷	稻荷甲923番地1外	平成31年1月7日	—	
G	五輪塔	大平1011番地3	平成31年1月21日	—	伝新田義治の墓
320	高見Ⅱ遺跡(電柱設置箇所)	双海町上灘戊525番地7	平成31年2月4日・5日・19日	20-21	平成31年度工事立会 令和2年度に包蔵地調査 カード作成
302	海辺城跡	双海町高岸甲1005番地1	平成31年2月12日・14日	—	
331	犬寄遺跡	中山町佐礼谷丙1221番地1	平成31年3月5日	30	令和3年度に包蔵地調査 カード作成
222	浜田遺跡近接地	下吾川1455番地1	平成31年3月20日	—	

聞き取り調査

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
127	猿ヶ谷1号墳 猿ヶ谷2号墳	上三谷乙11番地41	—	31	平成31年度以降調査継続 令和4年度に包蔵地調査 カード削除

試掘調査・確認調査

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
213	下吾川新池遺跡	下吾川741番地1	平成30年4月19日	32	
112	伊予小学校遺跡	上野2304番地	平成30年10月11日	33-35	
325	尾崎大人池遺跡	尾崎540番地外	平成31年1月12日～25日	35-41	令和2年度に包蔵地調査 カード作成

工事立会

No.	遺跡名等	地番	調査日	掲載頁	備考
A	大人池	尾崎498番地	平成30年6月8日・15日・18日・26日・27日	42-45	近世木樋の撤去

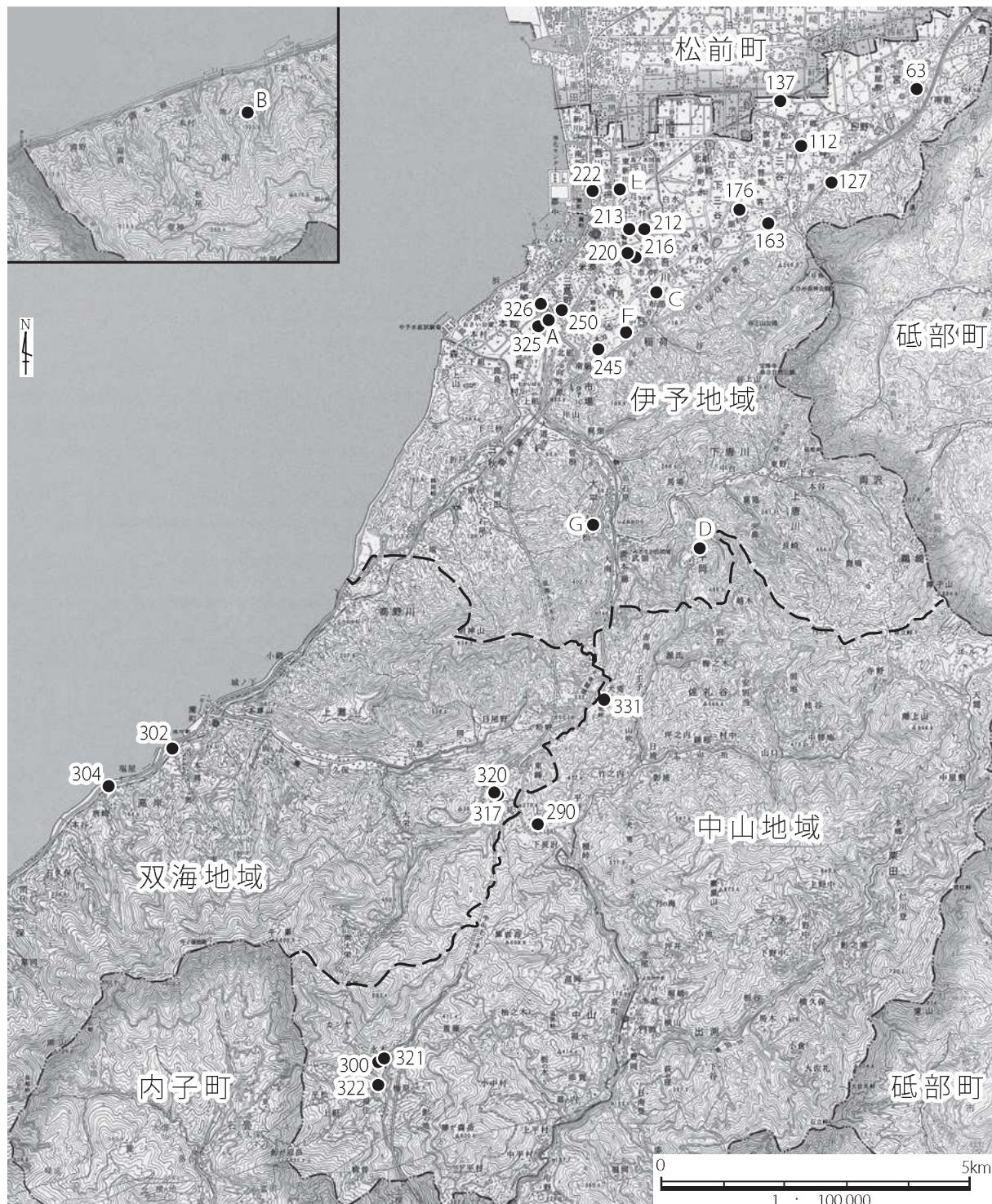


図2 調査遺跡位置図

第1節 平成29年度調査

(1) 現地踏査・現地確認の成果

1 大人池(尾崎)図2のA

平成27年度(伊予市教委2020)に引き続き踏査を実施した結果、大人池(ひょうたん池)の南西湖畔で遺物を採集した。平成29年度に須恵器(図4-1)、瓦質土器(図4-2)、近現代の窯道具(焼台、ハマ)の発見届を提出した。

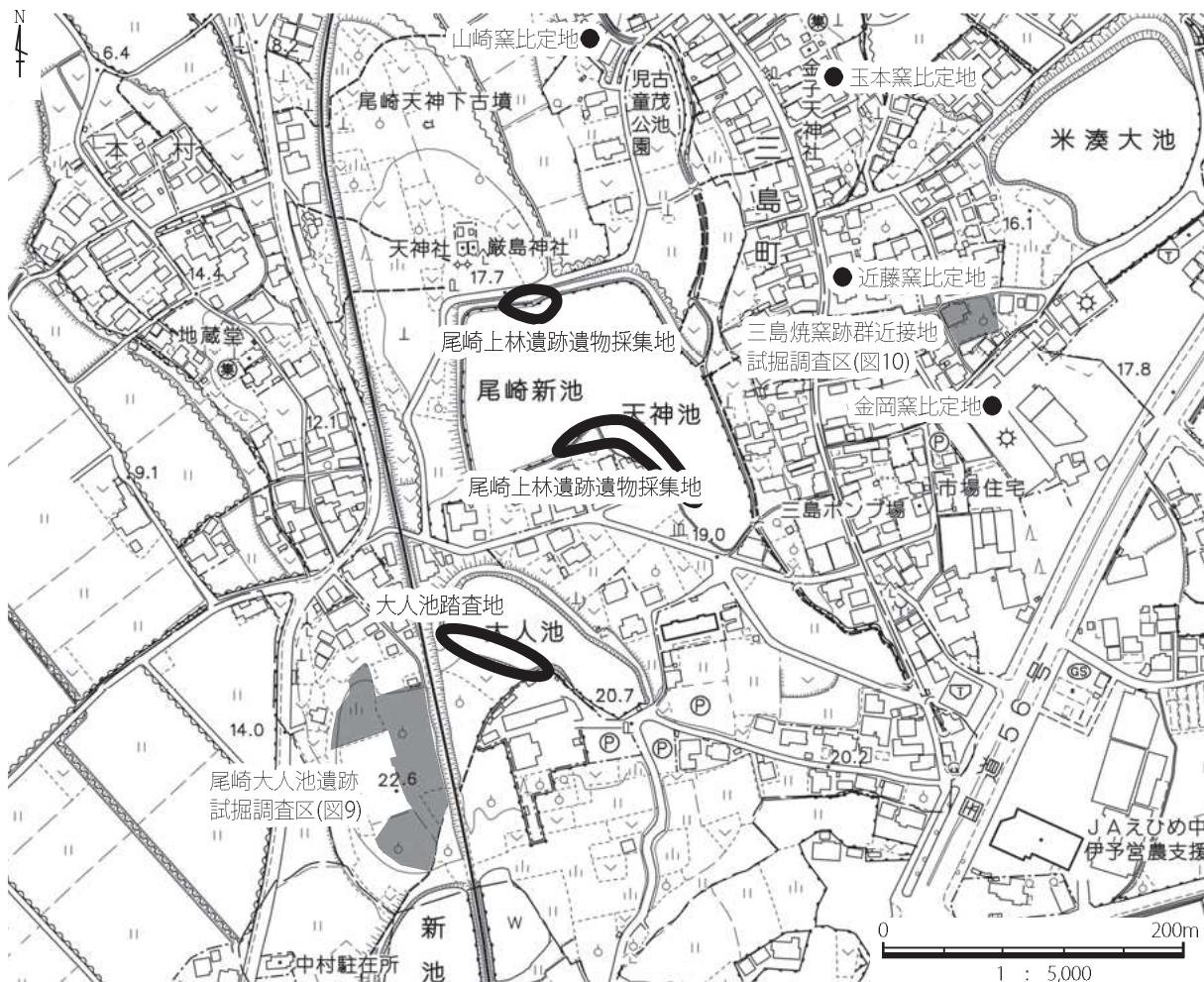


図3 尾崎周辺平成29年度調査地位置図



図4 大人池採集遺物(平成29年度発見届提出)

2 尾崎上林遺跡(尾崎)包蔵地番号326 ※当時は包蔵地外

過去の踏査では丘陵上で遺物の散布が確認されている(伊予市教委2020、唐崎旧石器資料館2022a)。この丘陵に隣接する天神池の湖畔で過去に市職員が採集した須恵器の発見届を、平成29年度に提出した。図5-3は坯身である。

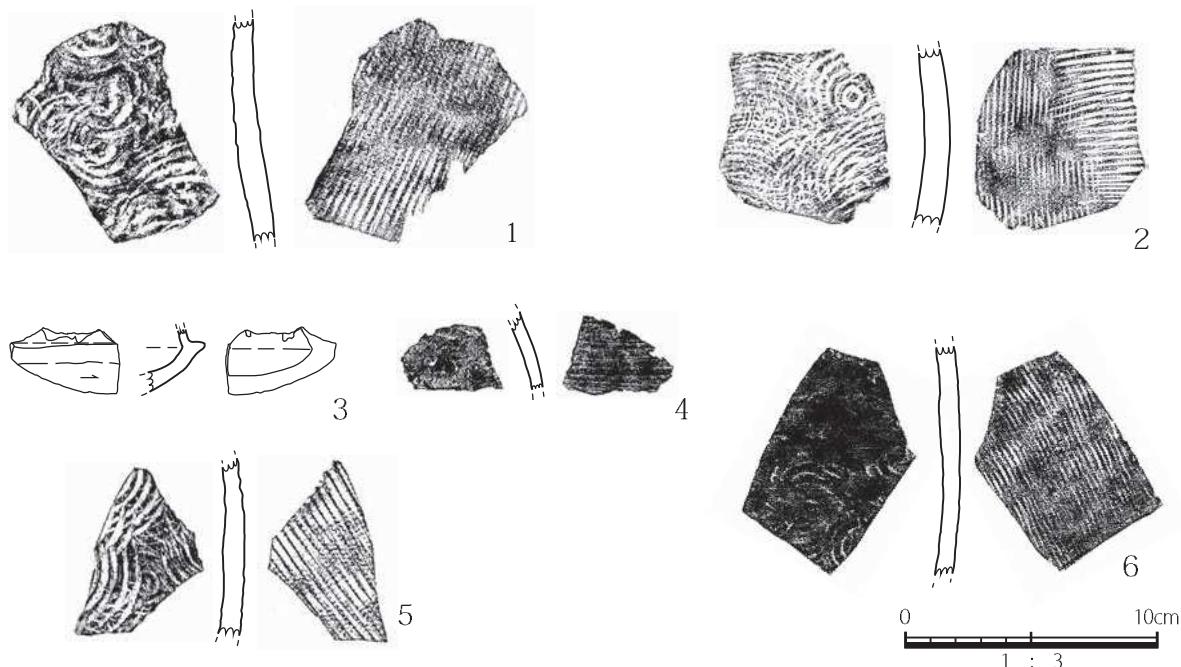


図5 尾崎上林遺跡採集遺物(平成29年度発見届提出)

3 上吾川八幡池遺跡(上吾川)包蔵地番号216

過年度の調査(伊予市教委2014,2020)に引き続き、縄文時代早期の押型文土器(図6-1)(兵頭2019)や中世の瓦器椀(図6-2)、須恵器(図6-3,4,5)、近現代の磁器等を採集した。

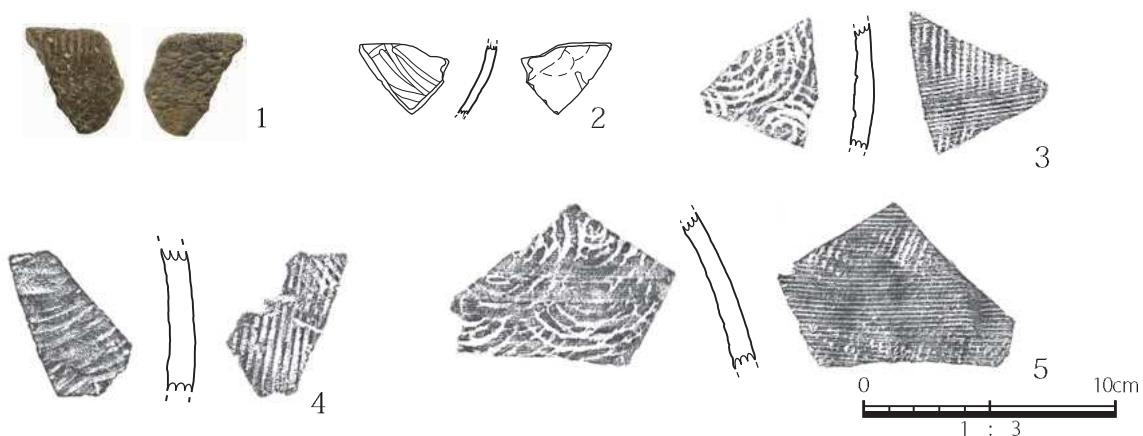


図6 上吾川八幡池遺跡採集遺物

4 内台遺跡(上吾川・下吾川) 包蔵地番号212

内台遺跡の上吾川側(南部)は、平成2年の発掘調査で弥生土器や須恵器が出土し、古墳時代の竪穴建物や柱穴が検出されている(伊予市教委1991)ほか、平成23年度に伊予市教委の試掘調査(伊予市教委2013)が実施されている。しかし、下吾川側(北部)への遺跡の広がりは明確でなかった。また、西に隣接する下吾川新池遺跡は、平成24年度の国庫補助事業の際に遺物が確認できなかつたとして範囲が大きく変更されており(伊予市教委2014)、内台遺跡との境界付近が包蔵地から外れた状態になっている。

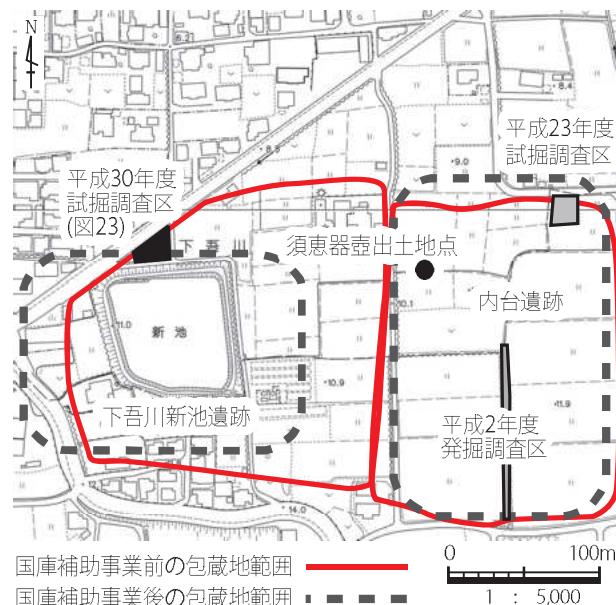


図7 内台遺跡周辺位置図

平成29年度、市民の提供により、下吾川側の畠地で出土した接合可能な須恵器広口壺(図8-1)の発見届を提出した。一帯では、現在でも耕作中に須恵器、中世の遺物、鉄滓などが出土する(令和4年度聞き取り調査、唐崎旧石器資料館2022a)ため、下吾川新池遺跡と合わせて遺跡の広がりを確認する必要がある。

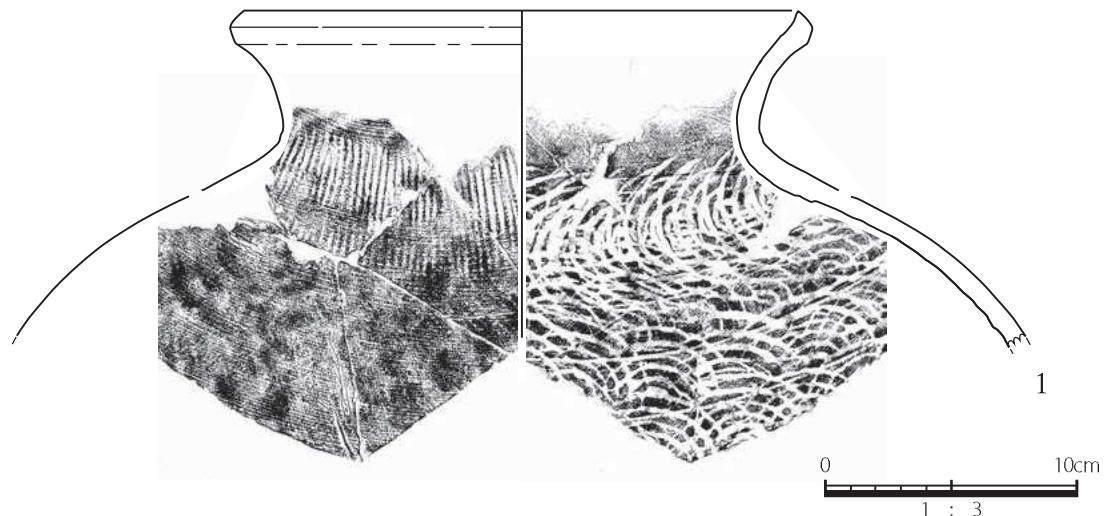


図8 内台遺跡出土遺物(平成29年度発見届提出)

(2) 試掘調査・確認調査の成果

1 尾崎大人池遺跡(尾崎) 包蔵地番号325 ※当時は包蔵地外

調査原因 大人池の溜池改修工事に伴う土取

開発面積 約5,575m²

調査面積 約14m²

調査概要

大人池に隣接する丘陵が土取場として削平されることとなった。当地は包蔵地に含まれていなかったが、遺物が採集されていることから、平成27年度に踏査と試掘調査を実施した。しかし、埋蔵文化財は確認されなかつた(伊予市教委2020)。

平成29年度に土取場の開発面積が確定したため、平成27年度調査範囲(約1,750m²)を除く丘陵頂部で試掘調査を実施した。1m²のトレンチ(T-1~T-14)を14ヵ所に設置した。結果、遺構遺物が確認できなかつたことを根拠に、埋蔵文化財が存在する可能性は低いと判断した。

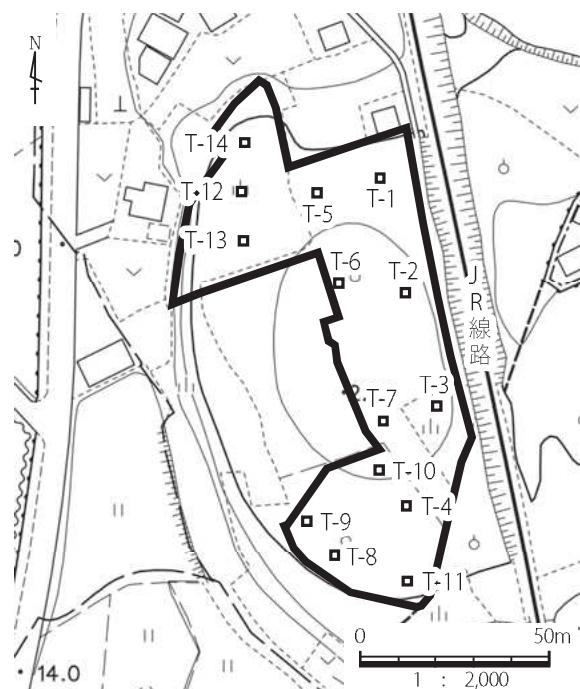


図9 尾崎大人池遺跡調査区トレンチ配置図



写真1 T-1北壁土層断面



写真2 T-2西壁土層断面



写真3 T-3北壁土層断面



写真4 T-4北壁土層断面



写真5 T-5北壁土層断面



写真6 T-6北壁土層断面



写真7 T-7北壁土層断面



写真8 T-8南壁土層断面



写真9 T-9東壁土層断面



写真10 T-10東壁土層断面



写真11 T-11南壁土層断面



写真12 T-12西壁土層断面



写真13 T-13南壁土層断面



写真14 T-14南壁土層断面

2 三島焼窯跡群の近接地(米湊)包蔵地番号250の近接地

調査原因 分譲住宅地造成

開発面積 897.38m²

調査面積 67.5m²

調査概要

三島焼窯跡群に近接する分譲住宅地(図3中の「三島焼窯跡群の近接地試掘調査区」)で、造成中に窯道具や焼き損じの磁器が多量に出土したと情報提供があった。近現代の窯業に関する遺物であることが想定できたため、事業者と協議した結果、現地保存できないことが判明し、本事業地を包蔵地として扱うかを決定する必要が生じた。判断材料として、遺跡の内容と広がりを確認する必要があったことから、愛媛県教育委員会に相談しつつ、外部専門家より調査方法の指導を受け、確認調査を実施することとなった。

調査区を横断する長いトレーナーを設定し、遺物は層位ごとに回収した。遺物は磁器の碗が多く、皿、鉢、碍子なども認められ、焼成品と未成品が含まれる。碗は、酸化コバルトを用いた型紙染付碗が主体であるが、銅版染付も認められる。窯道具は、足付ハマやツク、テモノを主体とし、サヤや被熱したレンガも含まれる(写真19,20)。なお、G, H, I区からは遺物が殆ど出土しなかった。

本調査区の東半分が近代の三島焼窯跡群を構成する窯のモノハラであることが確認できた。F区の8層は碍子が集中して出土する層位であることから、検出したのは二次的な堆積ではなく、一次的なモノハラの可能性が高い。判明している最寄りの窯跡は、約40m南南東に比定される金岡窯(市場甲139番地10)である。元所有者によると、本調査区は昭和11(1936)年に金岡窯から購入されたとのことである。よって、本調査区のモノハラは金岡窯の焼き損じを直接廃棄した一次的なモノハラと考えるのが自然であろう。

金岡窯は、文政元(1818)年に音右衛門が市場村庄屋の佐伯家から窯を譲り受けたことで始まった窯である。明治17(1884)年に金岡家の本邸と窯を三島に移転し、昭和9(1934)年に実業家に譲渡、東亜製陶所が発足した(石岡2015)。

2日間に亘る確認調査で遺物を採集し、遺跡の広がりを確認したことで、調査を終了した。協議の結果、「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができる」という愛媛県教育委員会の「開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱い基準」(平成12年3月30日)と照らし、近代に属する三島焼窯跡群は、特に重要な遺構である窯跡のみを包蔵地として扱い、今回調査したモノハラは包蔵地として扱わない方針となった。

事業者には、今回の調査において窯跡が確認できなかった旨、本調査区を包蔵地として扱わない旨、確認調査が終了した旨を説明し、包蔵地が近接しているため開発工事に際しては十分注意するようにと回答した。

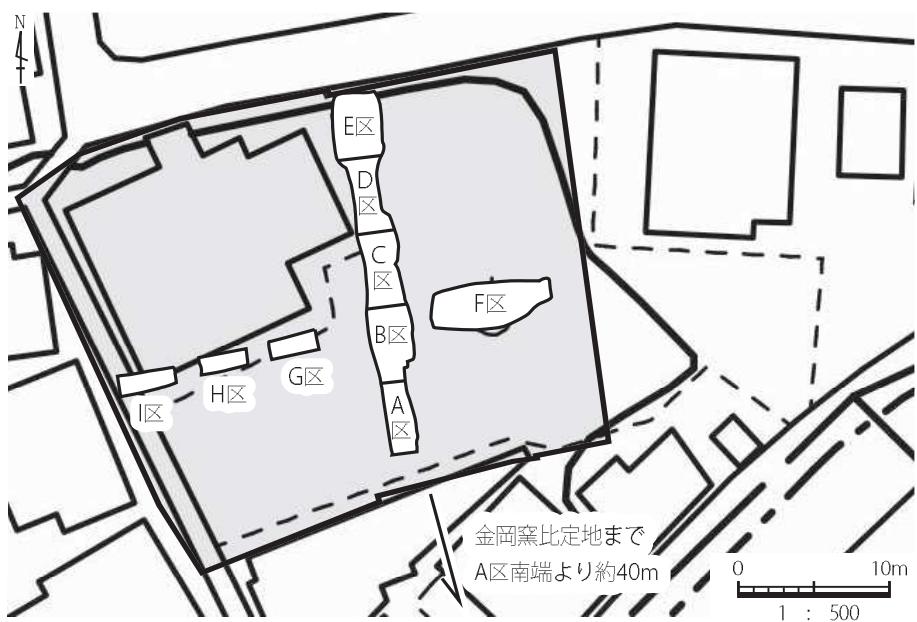


図10 三島焼窯跡群の近接地調査区トレンチ配置図



写真15 調査区全景(A-E区を南東より)



写真16 A-E区調査風景(北西より)



写真17 F区調査風景(東より)



写真18 I区(左手前)調査風景(南西より)

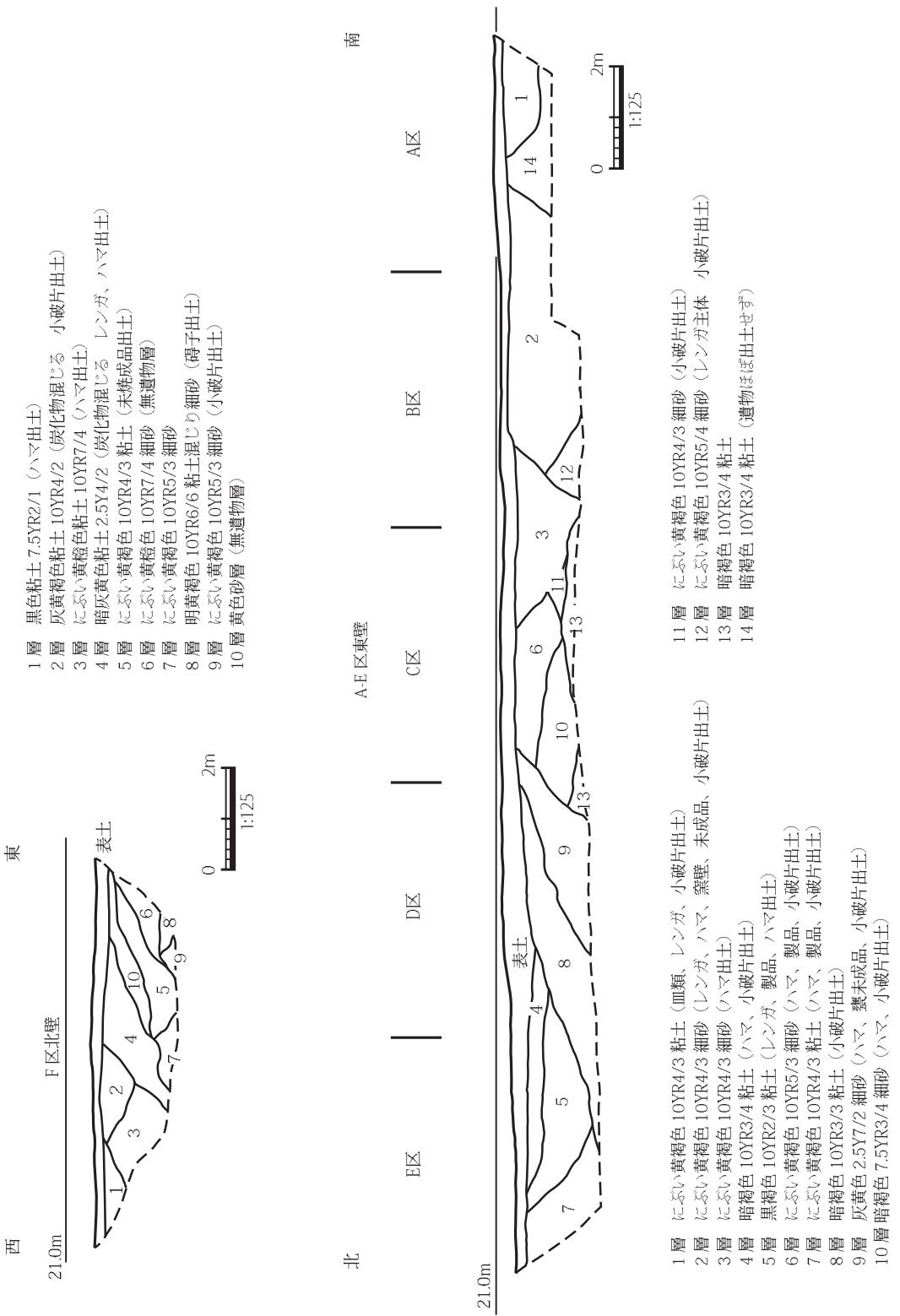


図11 三鷲焼窯跡群の近接地土層断面概況図



写真19 三島焼窯跡群の近接地出土遺物1(縮尺任意)



写真20 三島焼窯跡群の近接地出土遺物2(縮尺任意)

第2節 平成30年度踏査

(1) 現地踏査・現地確認の成果

1 高見Ⅱ遺跡・東峰遺跡第4地点 (双海町上灘) 包蔵地番号317・320

高見Ⅱ遺跡と東峰遺跡第4地点では、平成7年度と平成28・29年度に発掘調査が実施されている(埋文センター2002、伊予市教委2019)。平成30年4月時点で高見Ⅱ遺跡は包蔵地調査カードが作成されておらず、範囲が明確でなかったため踏査を実施した。

過去の発掘調査は、狭い谷部に挟まれた舌状の丘陵の南縁部で実施されていることから、舌状の丘陵上とその周辺に埋蔵文化財が存在するとの仮定のもと、高見地区広報委員に依頼したうえで踏査した。平成29年度採集分と合わせて、主な採集遺物の写真を示す(写真21)。遺跡の範囲を特定するうえでの特筆すべき成果として、舌状の丘陵の北部で赤色珪質岩製の剥片を採集した(写真21-3,4,5)。

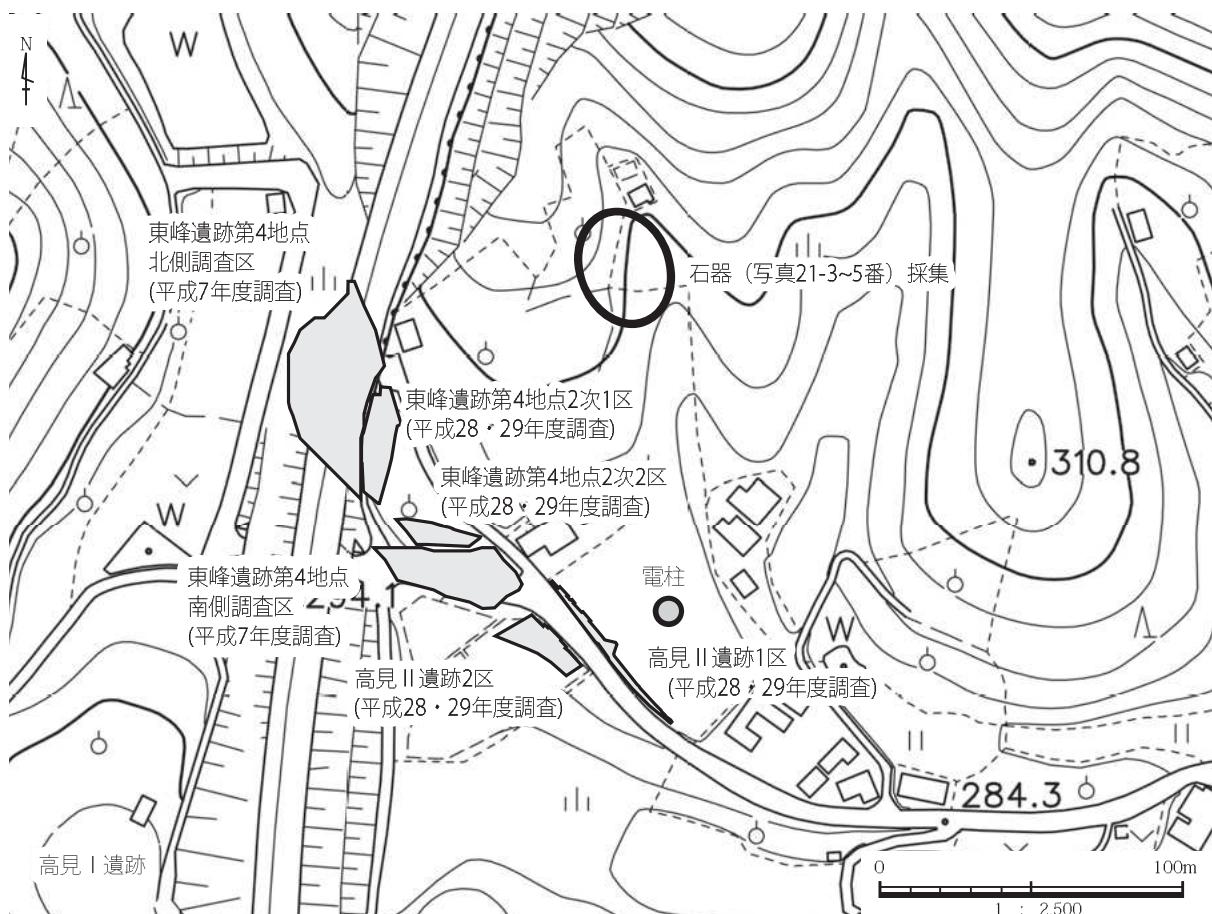


図12 高見Ⅱ遺跡・東峰遺跡第4地点調査地位置図

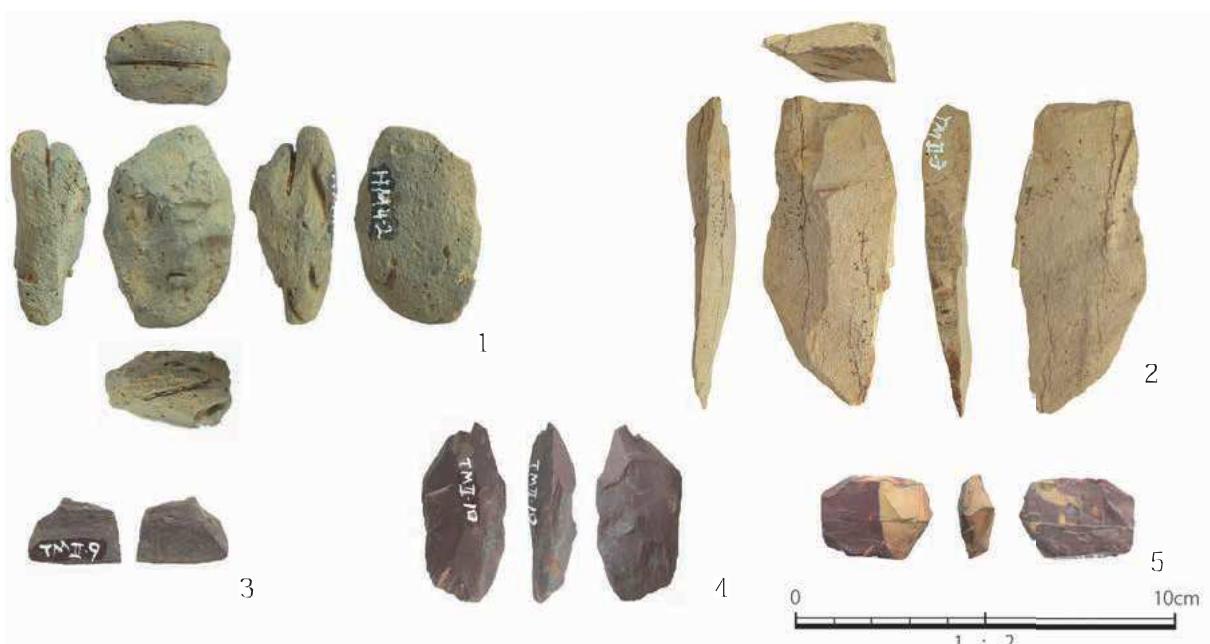


写真21 高見Ⅱ遺跡・東峰遺跡第4地点採集遺物(平成29・30年度)

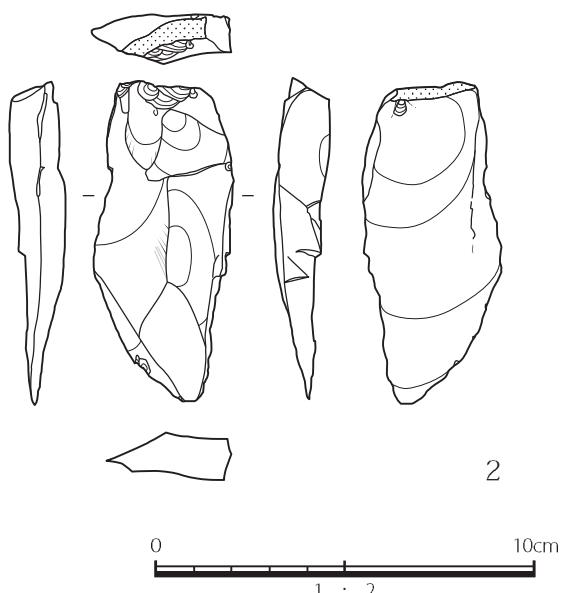


図13 高見Ⅱ遺跡採集遺物

平成31年2月以降、丘陵上の電柱設置に伴う現地確認と工事立会を実施した。工事立会は平成31年4月の実施となったため、この調査成果は、平成31年度の成果報告として次号で紹介する。

なお、上記発掘調査(伊予市教委2019)の際、高見Ⅱ遺跡1a区の土坑(SK-1)埋土中より出土した石鏃(掲載番号11、遺物No.70)について、遺跡の評価のため蛍光X線分析を依頼した(付編2の黒曜石製石鏃(No.2))。

2 平岡の採石場跡周辺(平岡)図2のD



図14 平岡周辺調査地位置図

平岡城跡(釜野城跡)は中世の城館跡である。『愛媛県中世城館分布調査報告書』(愛媛県教育委員会1987)では、地図上は集落の北の採石場跡周辺に、住所表記上は集落の南東の山地に位置が示されている。平成24年度に実施した山城調査の結果、後者に位置が比定された(伊予市教委2014)。

平成30年5月、地元住民より、集落の北の天神社の石垣が平岡城跡の痕跡との伝承があると情報提供を受けたため、現地確認した。踏査結果を専門家らと協議した結果、天神社と採石場跡周辺で城郭遺構等を確認できなかった。しかしながら、いくつかの資料(片上1986、伊予市立南山崎小学校1994)では、天神社近くの採石場跡周辺を平岡城跡とする縄張り図を掲載しており、伝承として重要である。

城郭遺構こそ確認できなかったが、



写真22 一字一石経塚(南東より)



写真23 五輪塔(南東より)

採石場近くの墓地で明治21(1888)年建立の一宇一石経塚「大乘妙典一字一石立」1基と、花崗岩と推測される火成岩を用いた中世の五輪塔複数基を確認した。また地元住民によると、昔、平岡の集落内西部の畠を掘った際に、「墓石」4基が出土したという。「石棺の蓋」のような「青石」も検出したため、墓ではないかと危惧してそのまま埋め戻したという。この際掘り出された「墓石」4基は近くの畠や墓地に移設されており、後日確認したところ、元禄年間の墓石3基と、中世の五輪塔と宝篋印塔の部材(空輪、火輪、笠)と判明した。このように、平岡の一帯が中世に利用されていた可能性は高い。

3 大人池(尾崎) 図2のA

平成27年度の踏査で、大人池では須恵器が採集されていた(伊予市教委2020)。平成30年6月、後述する工事立会(42-45頁)の際に、大人池の北西端で須恵器と土器片を採集した。

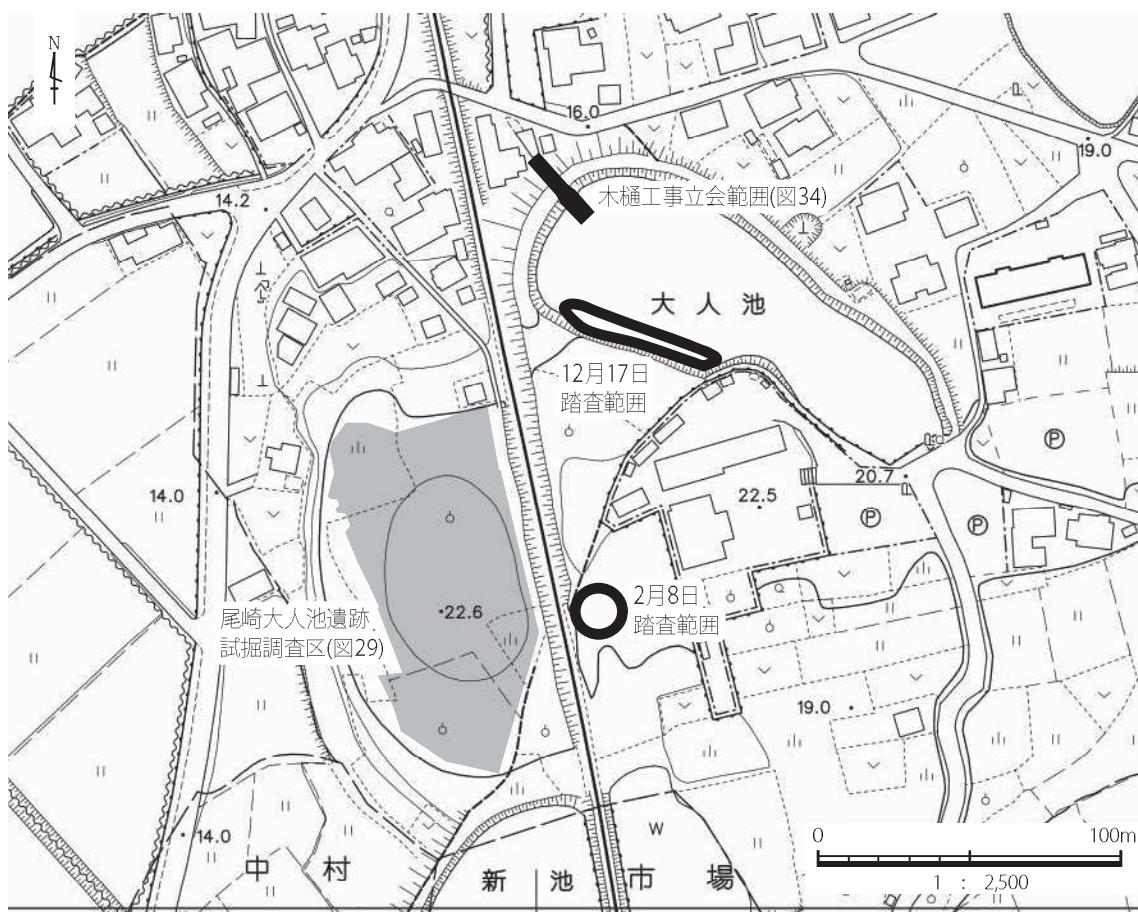


図15 尾崎周辺平成30年度調査地位置図

12月には尾崎大人池南西の湖畔で踏査を実施し、土器、須恵器、緑色片岩礫等を採集した。端面に斜格子目文を施した壺形土器口縁部(図16-2)や、弥生土器の甕(図16-8)、古墳時代中期と推測される須恵器坏(図16-3,4)の存在から、弥生時代から古墳時代に帰属すると推測される。

本章第2節第4項で後述するように、これらの遺物は周囲からの流れ込みであり、南に隣接する丘陵に遺跡が存在したことを強く示唆する。2月8日に、大人池の南の畠地で踏査を実施した。年代不明の土器細片等が採取できたのみであるが、地形等から判断して、一帯に遺跡が広がる可能性は高い。

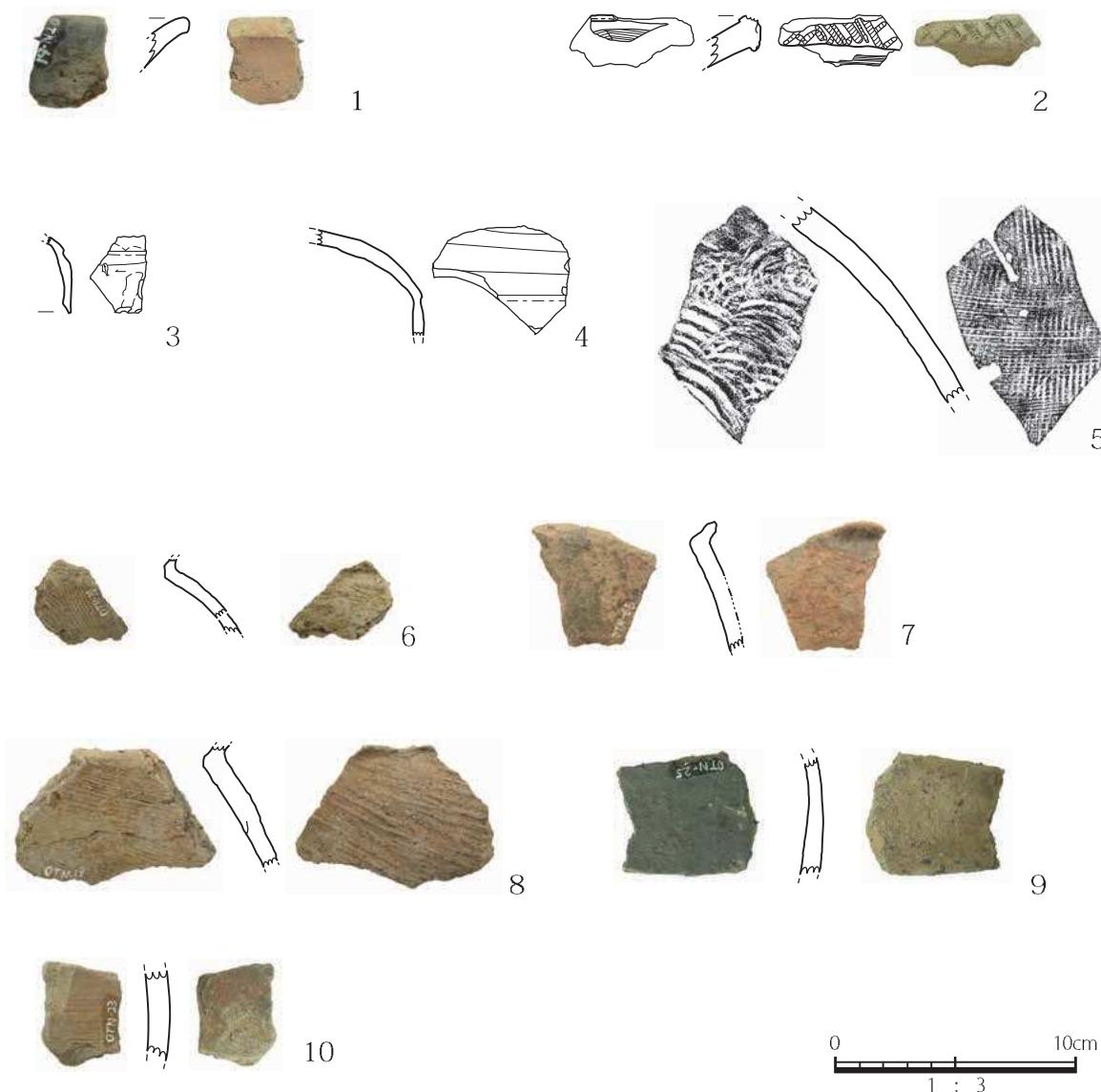


図16 大人池平成30年度採集遺物

4 永木藤縄之森三島神社遺跡(中山町中山)包蔵地番号321 ※当時は包蔵地外

尾根先端を削平して造成された藤縄之森三島神社の本殿は、棟札から天平勝宝6(754)年築と伝わり、境内には県指定文化財「石鳥居遺構」(応永9(1402)年銘)が位置する。『中山町誌』(中山町誌編纂委員会1996)編纂時に、森光晴氏(中山町誌編纂委員会(当時))によって社殿後背の竹林が調査され、永木三島神社古墳(一号墳・二号墳)として記載されていた。現在は、この古墳とされる地形を一部削平して、舗装道路が敷設されている。中山地域ではこれまでに古墳が確認されておらず、一号墳・二号墳の評価が課題となっていた。

平成30年12月4日に一号墳・二号墳踏査を実施した。一号墳は三島神社社殿の後背に位置する。『中山町誌』では、封土が流出して主体部の石材が一部露出する、とされているが、石室にしては使用される石材が小さいことから、古墳ではなく、石を積んだ石塚(南北約4.6m、東西約3.1m)と判断された。二号墳は、『中山町誌』の記載と、当時の調査に立ち会った土地所有者の証言を総合すると、盗掘を受けた古墳であるとみなされていた。しかし踏査の結果、一帯の竹林には石室に使用されたとみなせる石材は認められず、露出する岩は自然の岩石と思われる。よって、二号墳は遺構ではないと判断された。石塚のすぐ北には、石鎧神社の祠と大木が未開墾のまま残る一角があり、その北を旧大洲街道が走る。

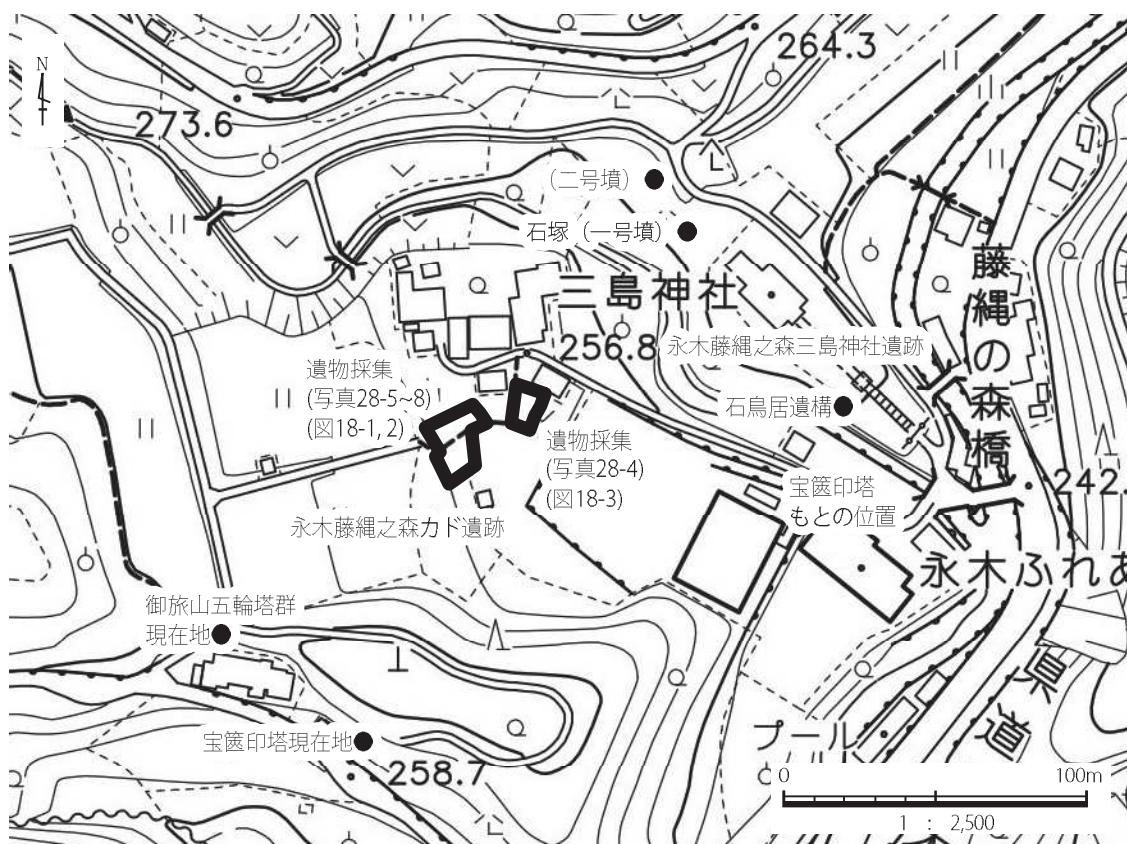


図17 永木地区調査地位置図



写真24 石塚(一号墳)頂部付近南面の石材
(南より)



写真25 石塚(一号墳)(南西より)



写真26 二号墳とされた箇所(西より)



写真27 二号墳調査風景

5 藤縄之森カド遺跡(中山町中山)包蔵地番号300

平成23~24年度の踏査(伊予市教委2014)に引き続き、平成30年12月4日に踏査した結果、昭和62年度の圃場整備の際に五輪塔が一帯で出土し、一箇所に集められていたことを確認した。これらの五輪塔は、御旅山北五輪塔群として報告されており(長井・西岡2016)、鎌倉時代末から室町時代と推定される。伊予市指定文化財である宝篋印塔(室町時代)が近くの御旅山に所在するが、これは現在の旧永木小学校周辺から移転されたものであると伝わる。

平成31年2月21日の伊予市教委と中山史談会との追加踏査で、土師器片や石器が確認できた。土師器皿(図18-1,2,3)はいずれも細片であり、器形の復元はできないが、3点が外底部に回転糸切痕が認められる底部片である。中世に帰属すると推測するが、詳細は不明である。石器はサヌキトイドの剥片(写真28-4)や赤色珪質岩の剥片(写真28-5)、黒曜石の剥片(写真28-8)である。特に黒曜石の剥片は、肉眼観察から姫島産ではないと推測された。愛媛県内における黒い黒曜石の報告例には、猿川西ノ森遺跡(埋文センター2008)や、平城貝塚(御荘町教育委員会1982)などがある。今回、肱川流域における重要なデータとなることを期待して、蛍光X線分析を依頼した(付編2の黒曜石製剥片(No.1))。詳細は付編2に譲るが、北部九州の黒曜石が当地に搬入されてい

たと推測される。

また、市職員から赤色珪質岩の剥片2点の提供があった(写真28-6,7)。

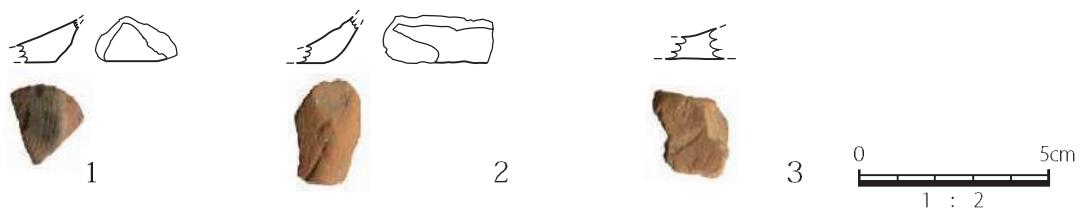


図18 藤縄之森力ド遺跡採集遺物

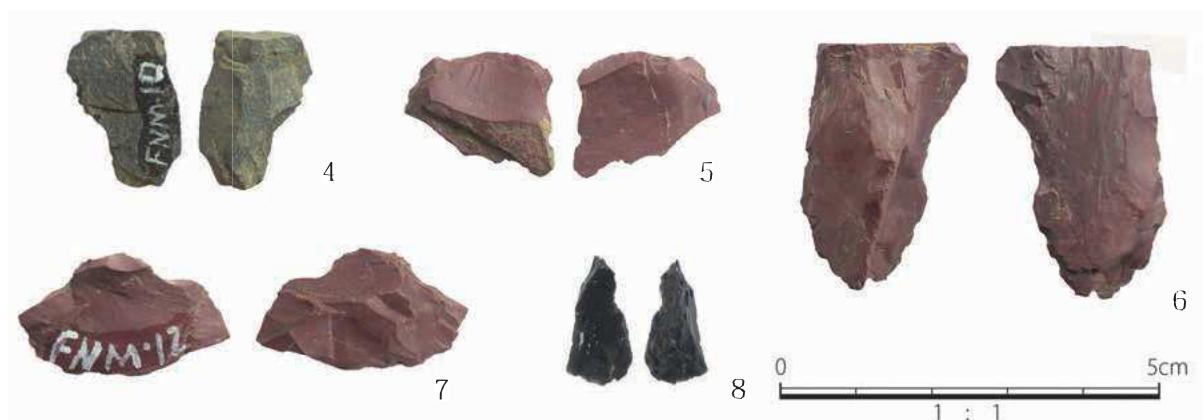


写真28 藤縄之森力ド遺跡採集遺物



写真29 御旅山五輪塔群(南西より)



写真30 調査風景

6 福住古墓塚(中山町中山)包蔵地番号322 ※当時は包蔵地外

福住では、鎌倉時代末から室町時代初頭と推定される古瀬戸の瓶子と四耳壺が出土しており(正岡1968)、『中山町誌』(中山町誌編纂委員会1996)に「古墓塚」として紹介されている。場所は、福住川が藤之郷川に合流する地点の右岸である。

平成30年12月4日の踏査の結果、石塚は川原石を積み上げたものと確認できた。地元の方によると、現在の墓を建てる為に石塚の一部を掘削したところ、「焼き物」が出土したという。当時の石塚の正確な範囲は、記録が残っていない。この「焼き物」は、正岡が報告した古瀬戸と推測されるが、現在は所在不明である。

石塚に隣接する五輪塔が、福住五輪塔群として報告されている(長井・西岡2016)。五輪塔は室町時代後期から安土桃山時代に帰属するとされ、宝篋印塔を線香立てに転用した墓石もみられる。

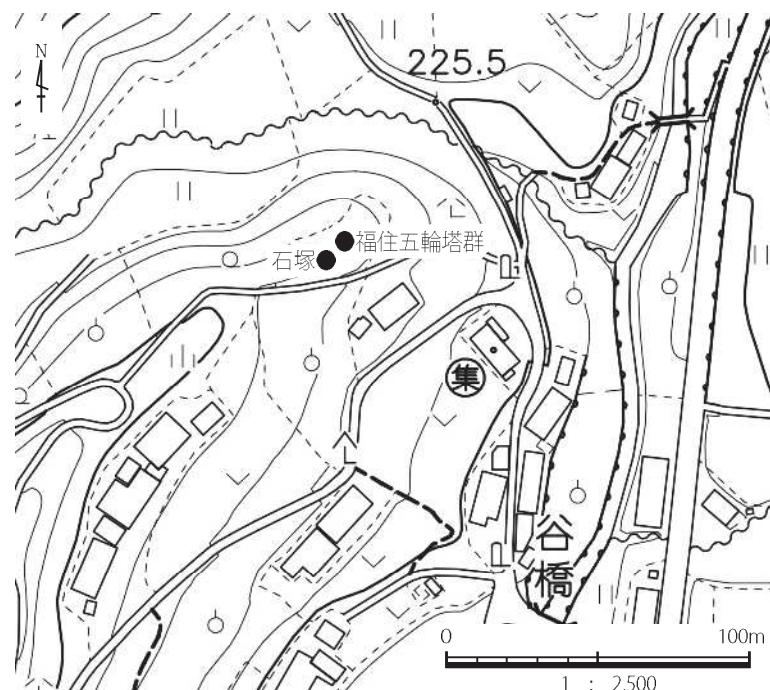


図19 福住古墓塚調査地位置図



写真31 石塚(南西より)



写真32 福住五輪塔群(北より)

7 下吾川地区現地踏査(下吾川)包蔵地番号222・図2のE

市街化が進む伊予市中心部では、分布調査が進んでおらず、埋蔵文化財がほとんど報告されていない。このため、市街地周辺の畠地を踏査して、埋蔵文化財の有無を確認することとした。愛媛県立伊予農業高等学校の協力を得て、伊予市遺跡詳細分布調査委員会と伊予市教委で踏査を実施した。

平成30年12月11日、浜田遺跡の位置する畠地から、各地に点在する愛媛県立伊予農業高等学校の敷地を徒歩で回り、客土がされていない畠地で踏査を実施した。年代不明の土器細片を採集したほかは、埋蔵文化財は確認できなかった。

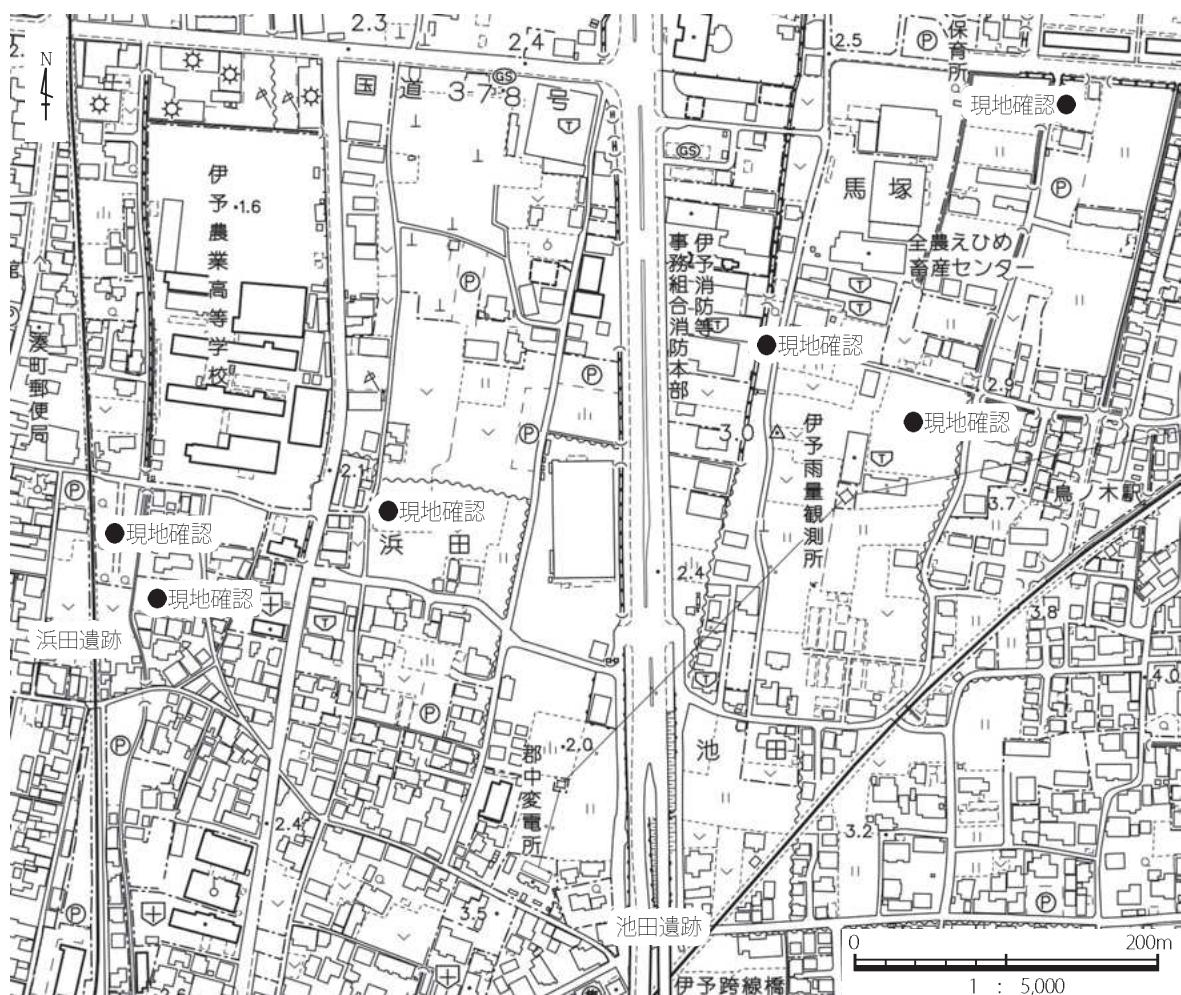


図20 下吾川地区調査地位置図

8 犬寄遺跡(中山町佐礼谷、双海町上灘)包蔵地番号331 ※当時は包蔵地外

犬寄は、近世に大洲城(現在の大洲市)と松山を結んだ旧大洲街道の要所である犬寄峠周辺に位置する。過去に市民が畠地で石鏃(現在所在不明)を表面採集したとの情報提供を受け、地元住民と共同で踏査を実施した。

踏査の結果、丘陵平坦部のうち3箇所にて、石器や土器片を採集した。石器は推定姫島産黒曜石(写真33-1)と赤色珪質岩(写真33-2,3)の剥片である。土器はいずれも細片で年代を特定できなかったが、高見I遺跡などに近いこと、石鏃が採集されていることから、後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡である可能性が高い。なお、石鏃採集地点は、平成30年に犬寄I遺跡として報告されているほか、写真33-3採集地点の近く(犬寄II遺跡)で後期旧石器時代のナイフ形石器が報告されている(唐崎旧石器資料館 2022c)。

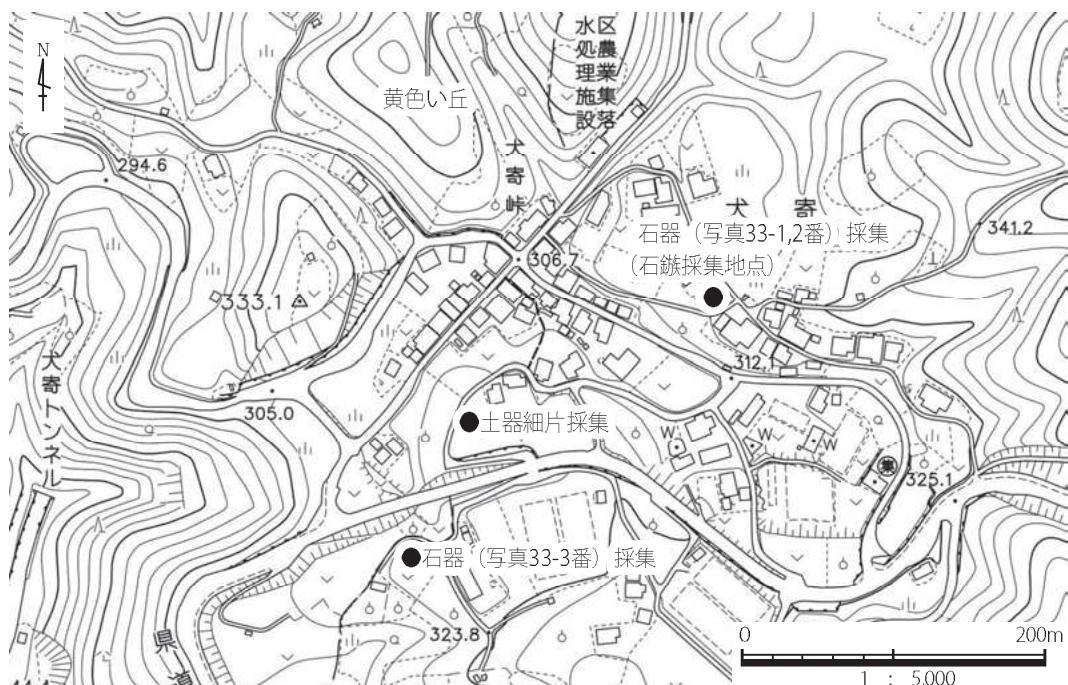


図21 犬寄遺跡調査地位置図

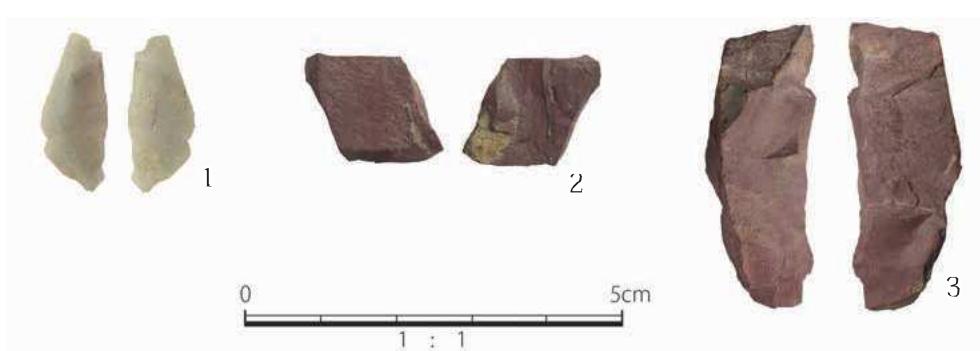


写真33 犬寄遺跡採集遺物

(2) 聞き取り調査の成果

1 猿ヶ谷1号墳・猿ヶ谷2号墳(上三谷) ※当時は猿ヶ谷2号墳 包蔵地番号127

猿ヶ谷1号墳と猿ヶ谷2号墳は、埋文センター(1998)により平成5年に発掘調査が実施され、前方後円墳「猿ヶ谷2号墳」として調査報告書が刊行された。この経緯については平成31年度以降に文献調査、聞き取り調査を実施したうえで、令和4年度第1回伊予市文化財保護審議会にて包蔵地としての扱いを審議事項としたため、次年度以降の調査成果として報告する予定である。

猿ヶ谷1号墳・猿ヶ谷2号墳は現存しないが、上記発掘調査以前に同地で採集されたとされる銅鏡を、平成30年5月10日に岩本崇氏(島根大学)に見ていただき、呉鏡であるとの所見をいただいた(付編1参照)。これに伴い、発見者より詳細な情報を聞き取った。

この銅鏡は、猿ヶ谷1号墳・猿ヶ谷2号墳付近に存在した小屋の雨垂れ直下で、平成5年に長井數秋氏が発見したとされる。正確な採集地点を図22に示す。その場に埋没していたのが露出した状況であったため、墳丘を造成する際に混入したものと推測される。この小屋は、高速道路建設に伴い削平されており、現存しない。現地確認は平成31年4月に実施したため、調査成果は次年度の成果として報告する。

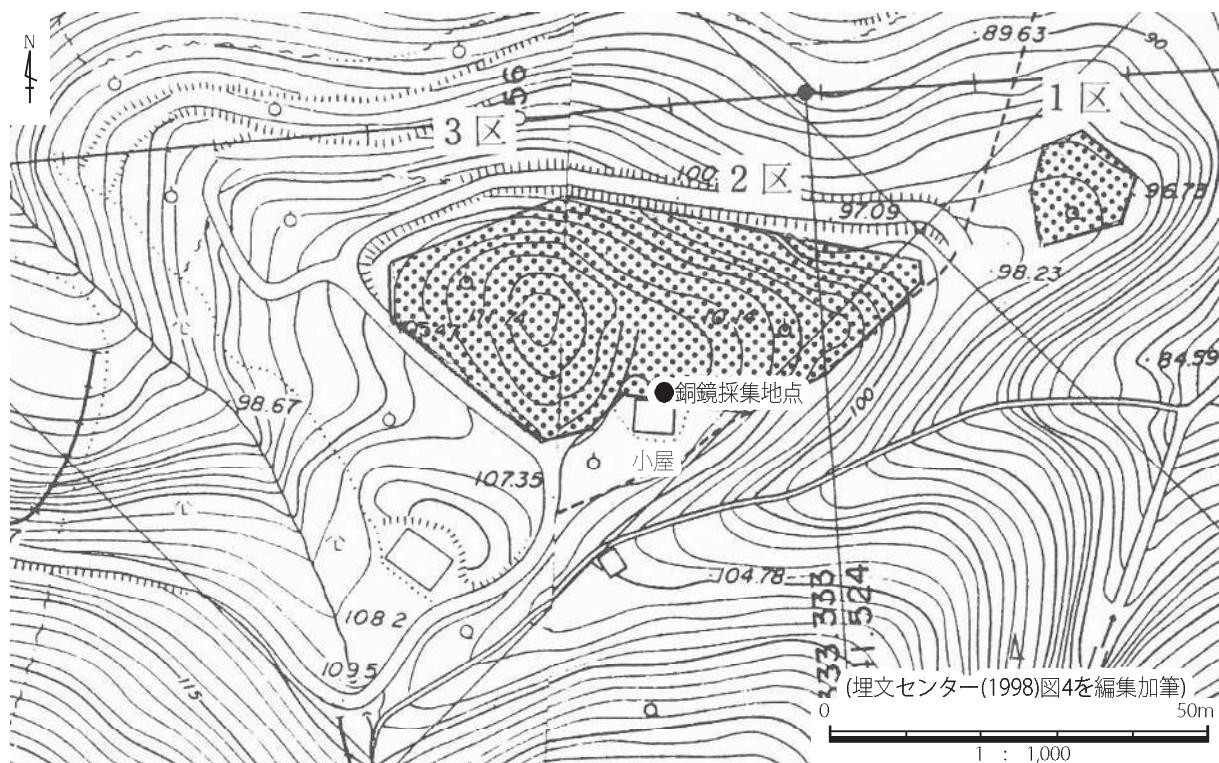


図22 猿ヶ谷1号墳・猿ヶ谷2号墳銅鏡採集地点位置図

(3) 試掘調査・確認調査の成果

1 下吾川新池遺跡(下吾川)包蔵地番号213

調査原因 住宅建設

開発面積 約437m²

調査面積 約24m²

調査概要

本調査区(図7の「平成30年試掘地点」)は扇状地扇端近く、梢川右岸の下吾川新池に隣接する。トレンチを3箇所に設定した結果、遺構や遺物包含層は確認できなかった。遺物はトレンチ3のIV層出土の磨耗した土器片1点のみで、流れ込みであると考えられる。以上のことから、本調査区に埋蔵文化財が存在する可能性は低いと判断した。

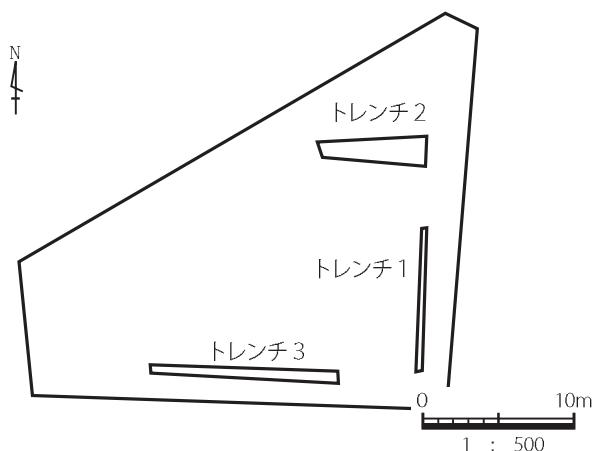


図23 下吾川新池遺跡調査区トレンチ配置図



写真34 トレンチ3北壁西端

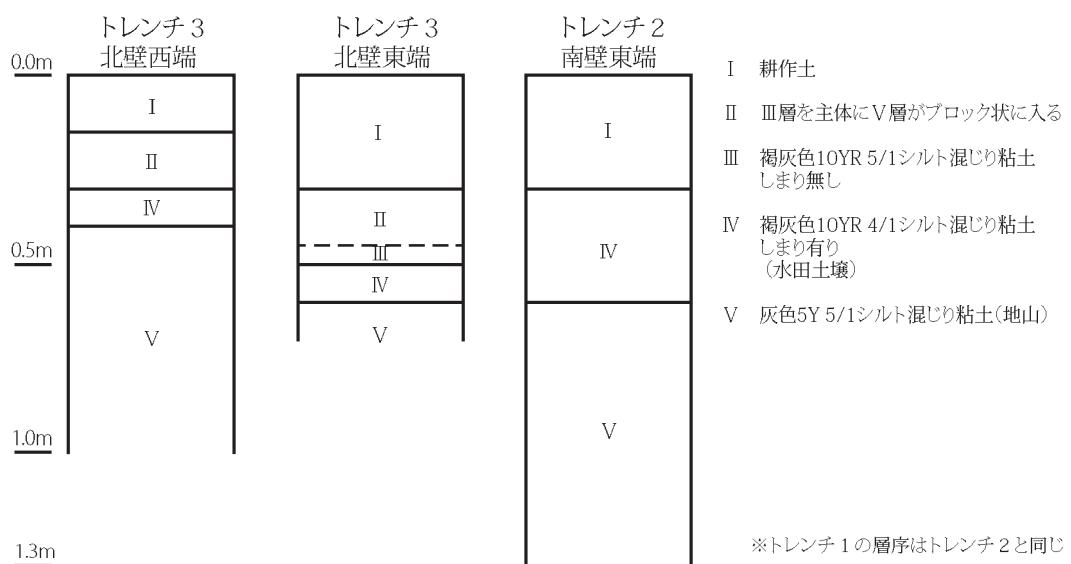


図24 下吾川新池遺跡土層柱状図

2 伊予小学校遺跡(上野)包蔵地番号112

調査原因 住宅建設

開発面積 約322.83m²

調査面積 約19.4m²

調査概要

本調査区は、新期扇状地堆積物からなる扇状地に位置する。トレント3箇所を設定し、うち2箇所(トレント1,2)を完掘した。遺物はIV層とV層から出土し、VI層では遺物が確認できなかった。本調査区は東から西にかけて緩く傾斜する土層(VI層)の上に遺物包含層(V層)が堆積している。V層は、平成24年度に隣接する伊予小学校敷地で実施した発掘調査(伊予市教委2013a)のIV層に対応すると考えられる。出土遺物には、須恵器(図28-1)や古代の須恵器壊蓋(図28-2)、弥生土器の鉢(図28-3)、不明鉄製品(図28-5)などが含まれる。以上、本調査区では弥生時代から古代にかけての埋蔵文化財の存在が確認できた。

なお、トレント3は天候の都合で完掘できなかったため、住宅基礎から十分な保護層が確保できる深さ1mまで掘り下げた時点で、遺物包含層相当層の上面に堆積したIII層が検出できないのを確認し、調査を完了させた。

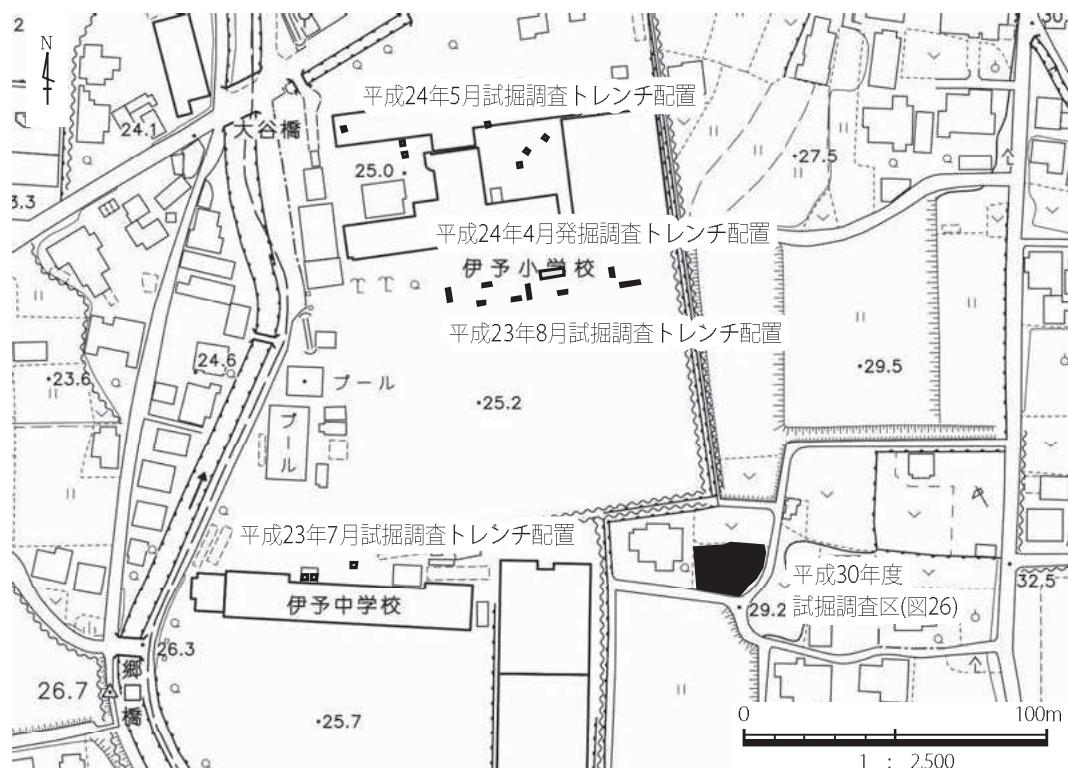


図25 伊予小学校遺跡調査区位置図

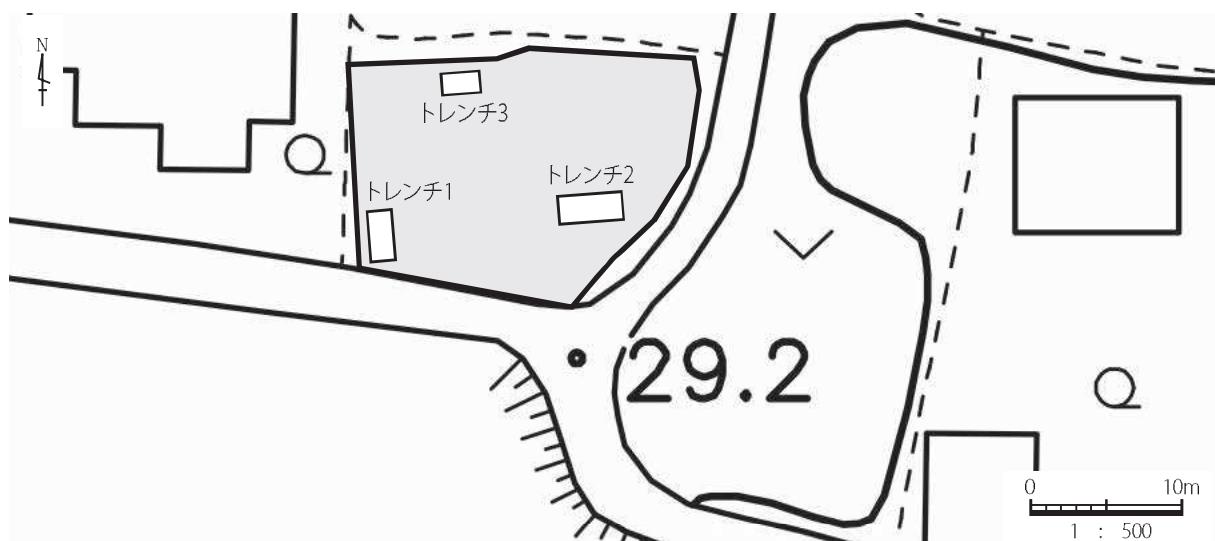


図26 伊予小学校遺跡調査区トレント配置図

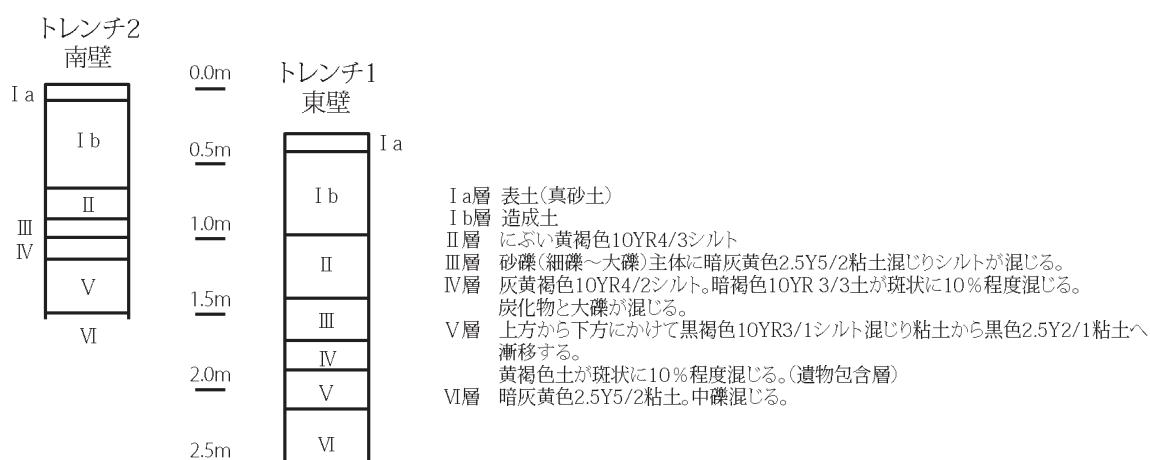


図27 伊予小学校遺跡土層柱状図



写真35 トレント1東壁



写真36 トレント2南壁

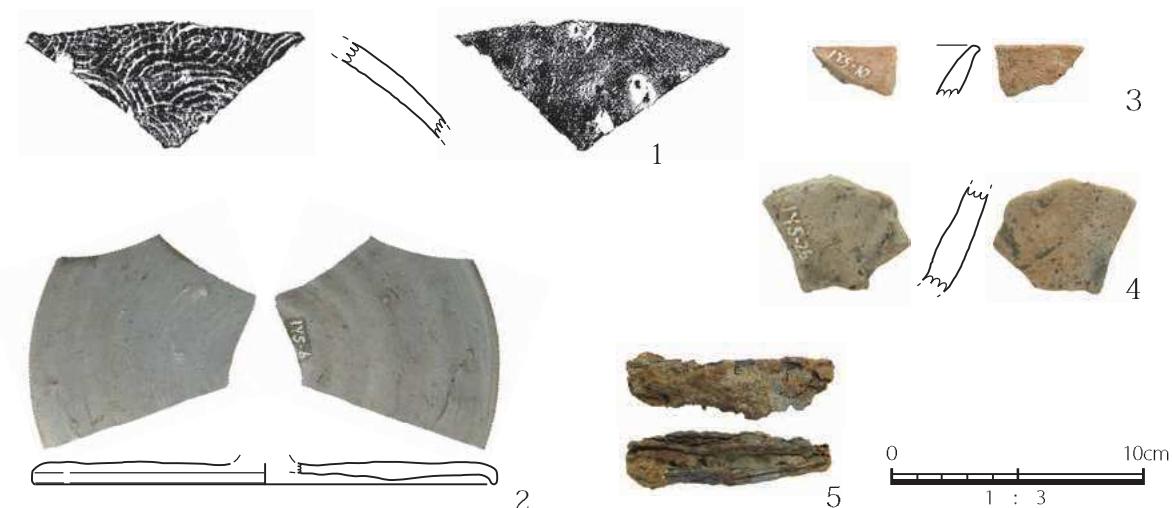


図28 伊予小学校遺跡出土遺物

3 尾崎大人池遺跡(尾崎)包蔵地番号325 ※当時は包蔵地外

調査原因 土取に伴う不時発見

開発面積：約5,765m²

調査面積：約1,529m²

調査概要

本調査区は、大人池の南の独立丘陵(中位砂礫台地)上に位置する。土地所有者によると、戦前は茶畠であったが、その後土地が分割され、ミカンの果樹園などの耕作地となったとされる。一帯は包蔵地の範囲外であったが、遺物が散布していることから、伊予市教委によって平成27年度(伊予市教委2020)と平成29年度(本報告書13-15頁)に試掘調査を実施した。結果、埋蔵文化財が報告されなかった。

平成31年1月8日、土取工事中に遺物が不時発見された。当時、丘陵上面は表土を薄く剥がれて地山が広範囲で露出し、一部で遺構が確認できる状況であった。丘陵の西部と南部は地山が深く削平され、丘陵西部は法面になっていた。竪穴建物が発見されたため、急遽試掘調査を実施することとなった。

大型油圧ショベルの平バケットを用いて遺構検出面を精査し、工事図面に遺構の位置と掘削範囲を記入した。時間の制約から遺構の詳細は記録せず、周囲の建物の位置や工事用基準杭等を利用してトランシットやメジャーにより大まかな位置を記録するに留めた。

本調査区の丘陵頂部では、平成27年度の試掘調査時、礫を含む粘土質の地山の上に薄い耕作土が直接載っていた(伊予市教委2020)。このため、丘陵頂部の遺物包含層は削平を受けたものと推測される。遺構検出面は、地山に表土が混じる漸移層(2層)である。

土器片や石器66点を採集したが、多くは工事掘削による排土中から回収したものである。土器は細片が多く、ほとんど器形が復元できない。摩耗を受けていない土器片の多くは、ハケ目調

整が施されている。弥生時代の壺形土器の頸部片(図31-6)は、縦方向にハケ目で調整した上から凸帯を貼り付け、板状工具の木口部を正面から押捺して斜格子目文を施す。梅木(2000)の伊予中部V-3様式またはV-4様式に相当すると思われる。須恵器は1点だけ確認できた(図31-5)。石器については両端に叩き痕がある敲石(写真44-15、図32-15)、緑色片岩製の凹石・敲石(写真44-18、図32-18)、敲打痕のみられる砂岩製の石皿(写真44-19、図32-19)や、その他の礫や剥片(写真44-13,14,16,17)も採集した。なお、本調査区の地表には、砂岩や推定サヌキトイドの大礫、巨礫が認められたが、中世以前に人為的に搬入されたものは判断できない。

遺構は、竪穴建物3棟、溝状遺構1条、不明遺構複数が確認できた。遺構は丘陵の縁辺部に集中しており、地形や過去の調査成果から判断するに、調査区外に広がる可能性が高い。

SI-1：一辺4.6m程度の隅丸方形の竪穴建物である。埋土中より弥生土器の胴部片(図31-4)が出土した。深さ不明。

SI-2：竪穴建物である。平面形は不明。西側は工事による法面に切られ、幅7m程度の断面が観察できる。深さは60cm程度である。埋土中に多数の土器細片が確認でき、埋土の底部近くから須恵器片が出土した(図31-5)。

SI-3：一辺5m程度の竪穴建物である。床面は東から西にかけて傾斜しており、深さ30cm～50cm超である。

SD-1：機能不明の溝状遺構である。丘陵南部は重機進入路の建設に伴い地山が削平されているため、削平を免れた溝状遺構の底部が残存しているのみである。埋土中に摩耗した脆い土器細片を多く含む。

その他：円形の不明遺構が複数確認できた。多くは直径20～30cm程度で輪郭が不明瞭であるが、一部は直径が1m近くに達する。丘陵の中央部から中央東部にかけて集中するが、全体的に広く分布している。埋土は黒褐色粘質土で、炭化物や焼土を多量に含む。なお、一定間隔で規則的に配置されている一辺50～100cm程度の方形や隅丸方形(一部円形)の不明遺構は、一部を半裁したところ埋土にプラスチック等を確認したため、現代のミカンの植栽痕と判断した。

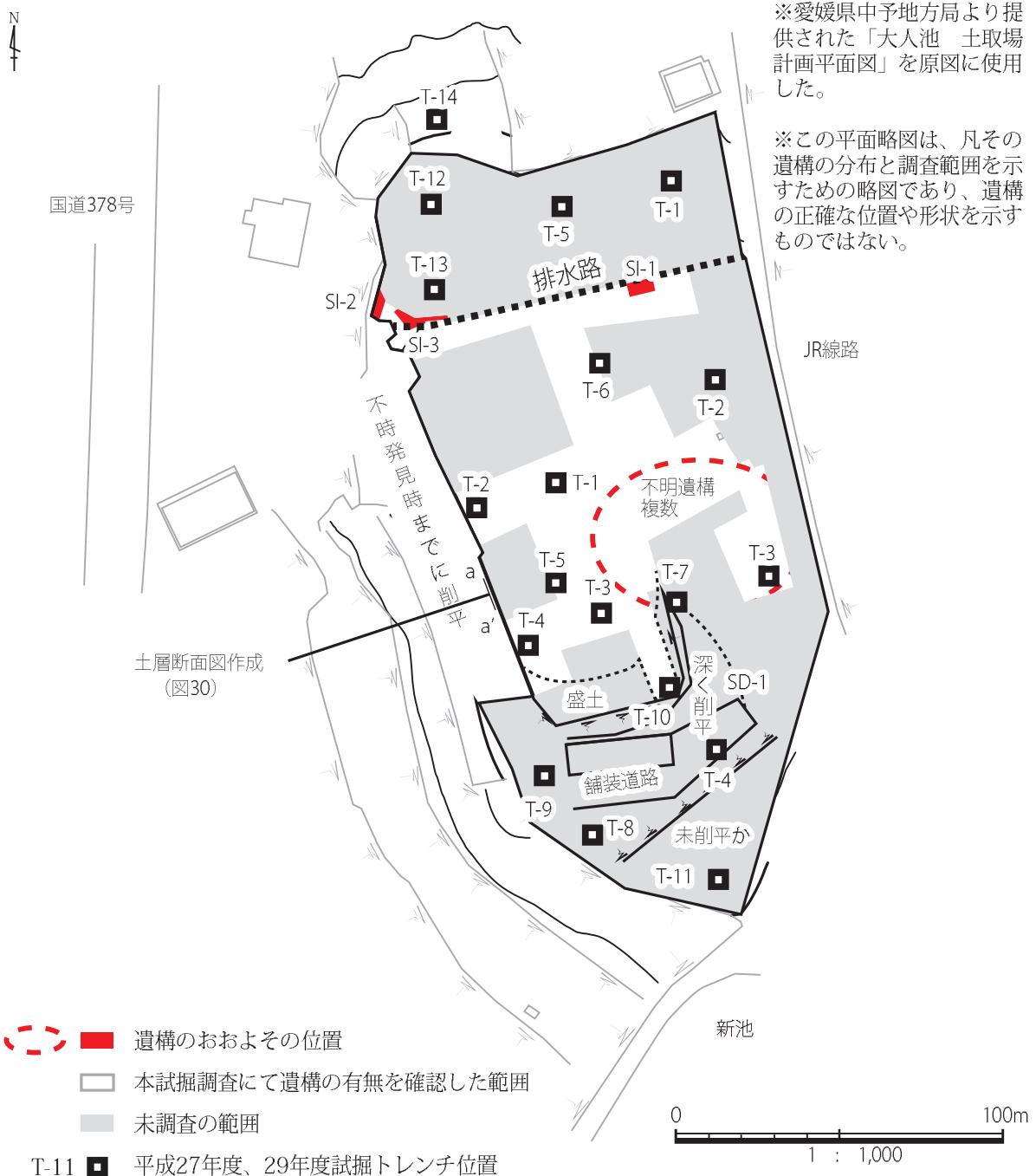


図29 尾崎大人池遺跡平成30年度調査区平面略図

今回の試掘調査により、調査区内に埋蔵文化財が確認された。埋蔵文化財は、独立丘陵上の全面に存在すると推測される。遺構は、丘陵頂部において分布が疎らで、少し下った頂上部周縁に密に分布する傾向が認められる。丘陵西部の法面以西にも遺構が存在したことが想定されるが、削平されて現存しない。丘陵南部にも遺構は認められるが、SD-1周辺は工事によって地山が舗装されているため、確認できなかった。丘陵北部は工事による改変が少なく、遺構が密に残存する可能性が高い。土器からは、弥生時代から古墳時代初頭にかけての集落跡であると見なせる。須恵器も採集されているため、古墳時代以降の遺構も存在すると思われる。

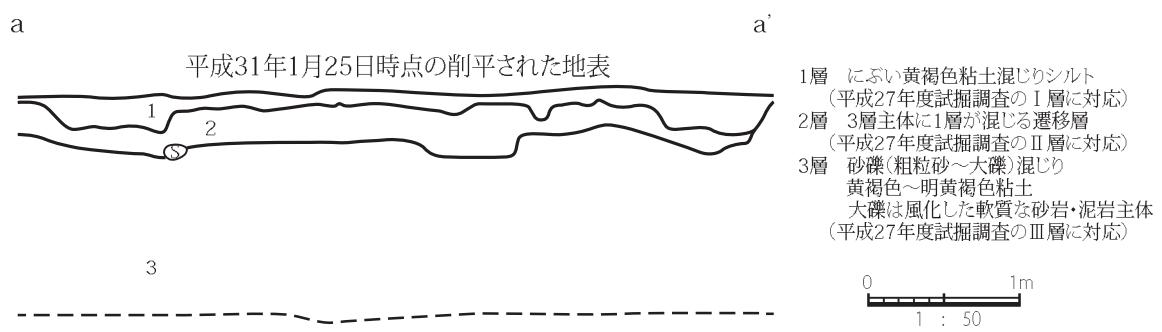


図30 尾崎大人池遺跡土層断面図



写真37 尾崎大人池遺跡土層断面



写真38 本調査区全景(北より)



写真39 SI-1検出状況(南より)



写真40 SI-2検出状況(北より)



写真41 SI-3検出状況(南より)



写真42 SD-1検出状況(北東より)



写真43 不明遺構と植栽痕(北西より)

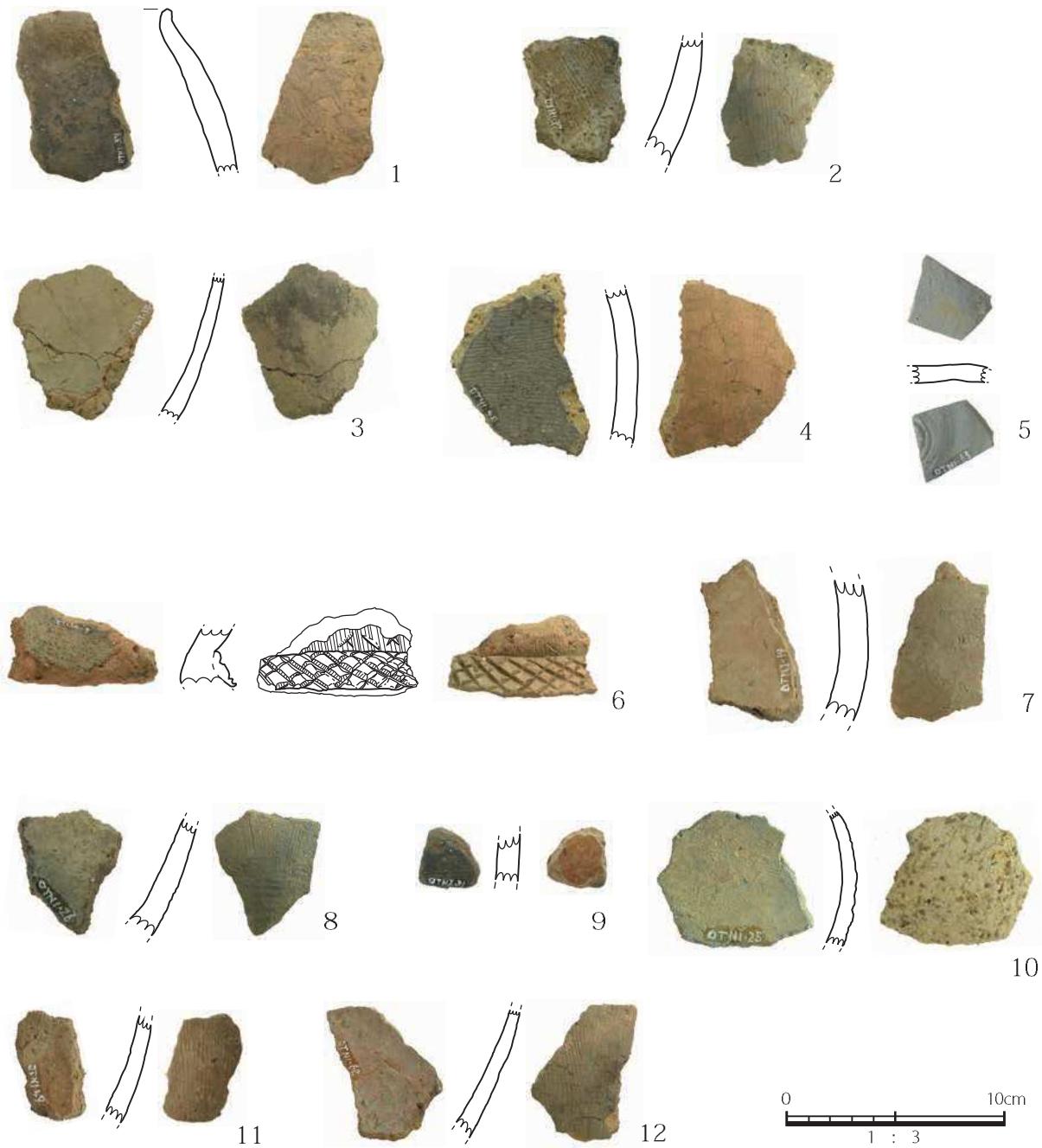


図31 尾崎大人池遺跡採集遺物1

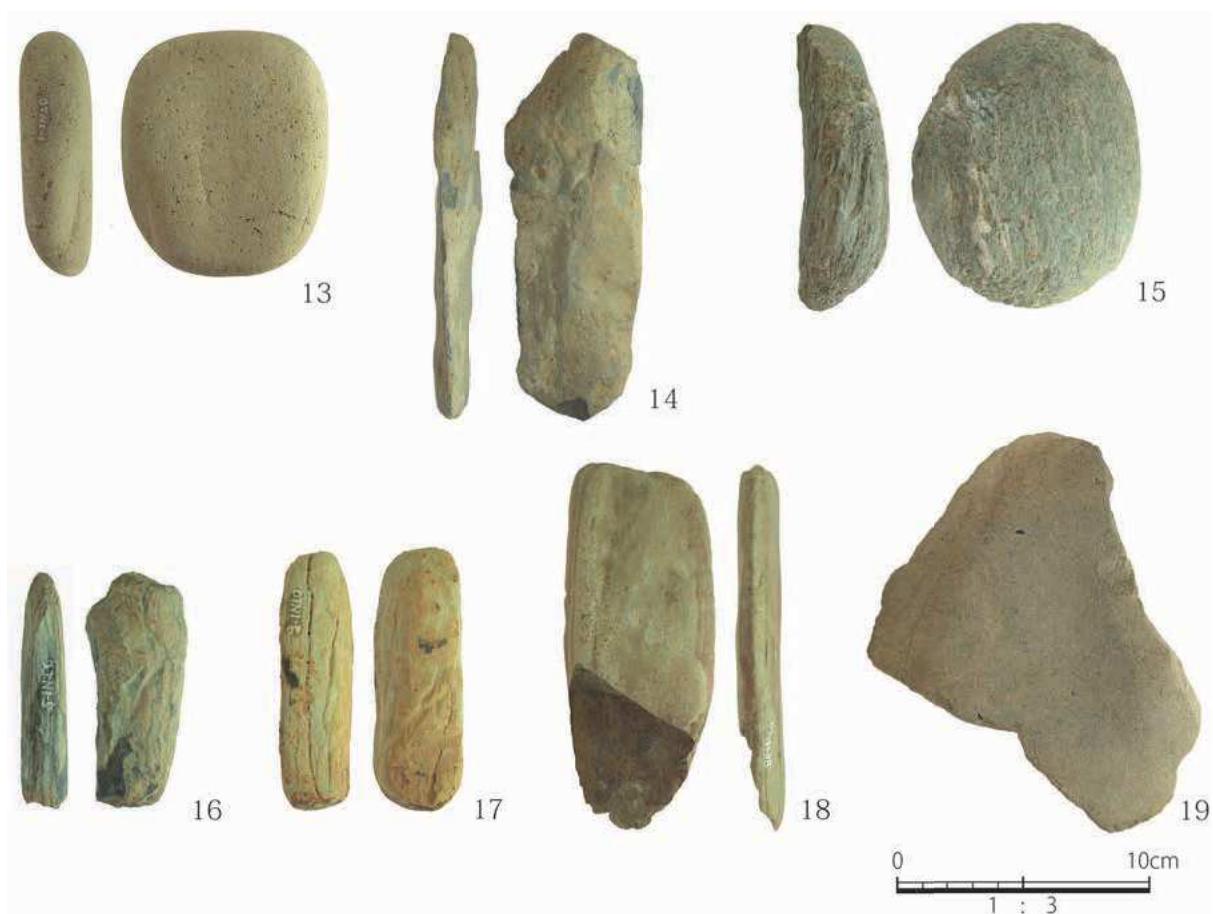


写真44 尾崎大人池遺跡採集遺物2

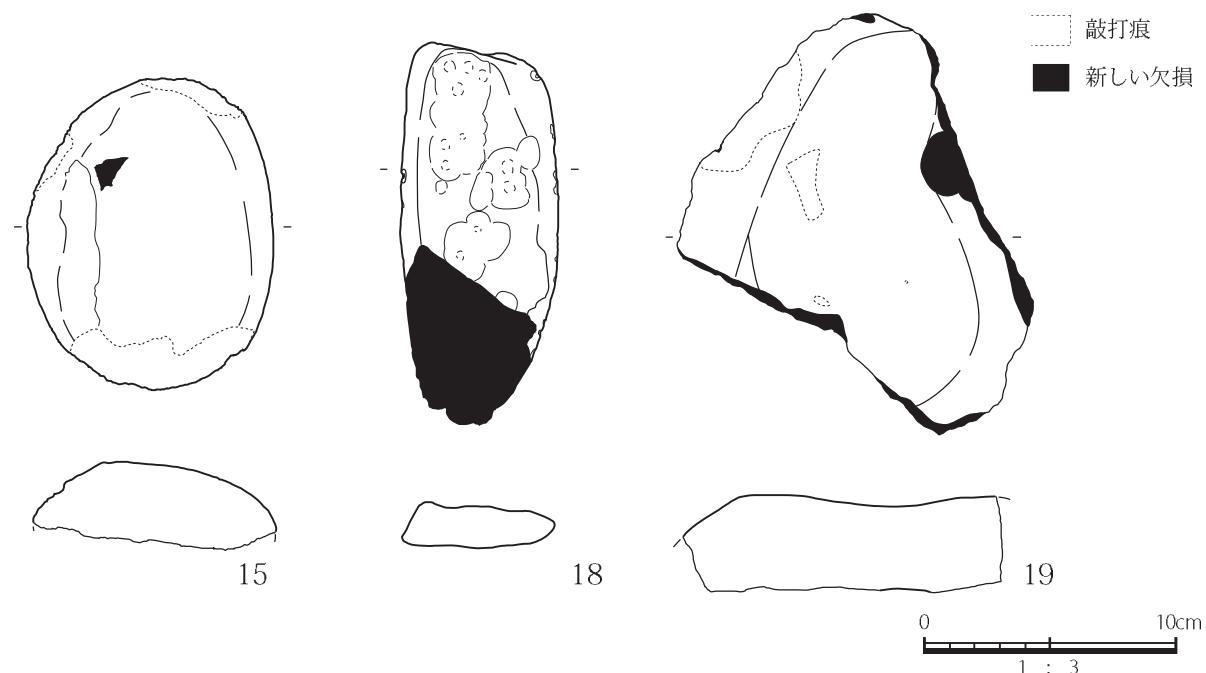


図32 尾崎大人池遺跡採集遺物

(4)工事立会の成果

1 大人池における近世木樋撤去工事立会(尾崎)図2のA

調査原因 溝池改修工事に伴う古い木樋の撤去

調査概要

溝池改修工事に伴い、大人池の北西端(図15の「木樋工事立会範囲」)で近世に帰属すると推定される木樋が確認された。平成30年6月15日、事業主体である愛媛県中予地方局により、大人池で『大人池既設取水施設説明会』が実施された。当日までに、木樋の上面が露出するように土砂が除去されており、木樋の平面形が観察できるようになっていた。愛媛県教育委員会と相談した結果、近世・近代の構造物につき、文化財保護法第96条、97条の対象外であることを確認したため、伊予市教委の判断で対応することとなった。工事計画上、現地保存ができないので、工事立会のうえ記録保存することとした。

6月18日と26日に平板測量を実施し、釘穴、横木の位置を記録した。

6月27日に木樋の撤去作業に立ち会い、木樋の一部、横木1本、和釘を回収した(図29)。木樋は全長約27mであり、構造は以下の通りである。なお、南東(取水口側)から北西(池外)にかけて順番に1本目～6本目とする。

- いずれも樹皮が残る未加工なマツ(肉眼観察による推定)の丸太を半裁し、材に並行する溝(幅約20cm、深さ約10cm)を掘り込んで導水路としている。1本目と、5・6本目は、底部を削り平坦な面を成形している。
- 標の導水路部分は、年輪に沿って掘り込まれている。一見すると蓋にも導水路が浅く掘り込まれているようにみえるが、これは人為的に加工されたのではなく、水による侵食作用を受けた結果、自然に削れた結果と推測される。
- 標の端部、繋ぎ目に凹凸を削りだして、樋が上下左右にズレないように工夫している。
- 6本の樋のうち、両端を除く10箇所の端部が接続部である。うち、3箇所は凸、7箇所は凹の形状をしている。4本目の南東端は、凹の加工が不明瞭である。
- 1本目-2本目、4本目-5本目と5本目-6本目は、凹と凸を組み合わせて接続する。
- 2本目-3本目と、3本目-4本目の接続部は、凹同士で接続している。
- 蓋も端部に凹凸を削りだして接続部で組み合せている。2本目の蓋のみが、両端が凹になっている。5本目の北西端から6本目にかけては蓋が消失していた。
- 木樋の下に敷かれている横木はマツ(肉眼観察による推定)の細材である。
- 木樋や横木の表面(樹皮)が黒く変色している。樹皮が剥がれた箇所は変色しておらず、被熱ではなく、水浸環境による変色と推測される。
- 蓋を樋に固定する釘は、3本目的一部分を除いて、両側縁でほぼ対になる位置に打たれている。取水口周辺と栓を除き、木樋に使用されているのは全て断面が正方形の和釘である(図33-1, 2)。
- 標と蓋の間にシユロ紐を1～2条ずつ挟んでいる。漏水防止のためと推測。
- 溝池に最も近い1本目の上部に取水口の孔があり、丸太の栓(縦樋)で蓋をする。

- 1本目の東端20cm区間だけは、樋と蓋を分離していない。また、この丸太の東端には直径10cm程度の孔が認められ、縦樋で栓をしても、水が木樋に常に流れ込む構造になっている。この孔の機能や用途は不明である。

銘文等は確認できなかったが、明治5(1872)年に旧大洲県が作成した『伊豫國伊豫郡之内村々池帳』には「文政七甲申年樋替」との記載がある(柚山俊夫氏私信 平成30年6月16日)ため、文政7(1824)年製造の木樋である可能性が高い。

木樋の記録調査に前後して、堤体断面とその周囲に土器の散布を確認した。6月27日の木樋撤去作業の際に、文化財アドバイザーの指導を得て遺物を回収した(遺物については本報告書23-24頁参照)。

大人池は丘陵に挟まれた谷状地形を利用して造成された可能性が高い。その西側の丘陵上に遺跡(現在の尾崎大人池遺跡)が存在し、遺跡から遺物が流れ込んで、溜池造成前に堆積したものであると推測された。堤体断面には、木樋が埋設されたレベルの上に、古い堤体らしき黒褐色土が盛られており、その上に現在の堤体を造成している。遺物が含まれているのは、古い堤体と木樋が埋設されたレベルの2層である。

検討した結果、これら遺物包含層は流れ込みによる堆積と溜池建設に伴う造成土であり、遺物採集と写真による記録に留め、埋蔵文化財として扱わないとの方針となった。その一方で、遺物が池内に流れ込んでいる事実が明確となつたため、愛媛県中予地方局に対して工事に際しての注意を求めた。

切り出した木樋の一部は、歴史資料として尾崎地区から伊予市教委に寄贈された。

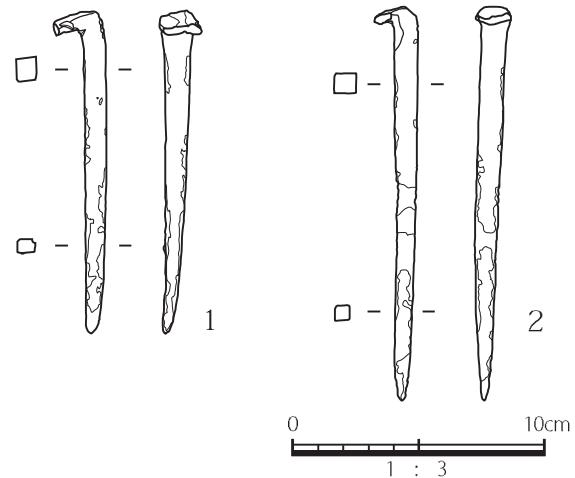


図33 大人池和釘

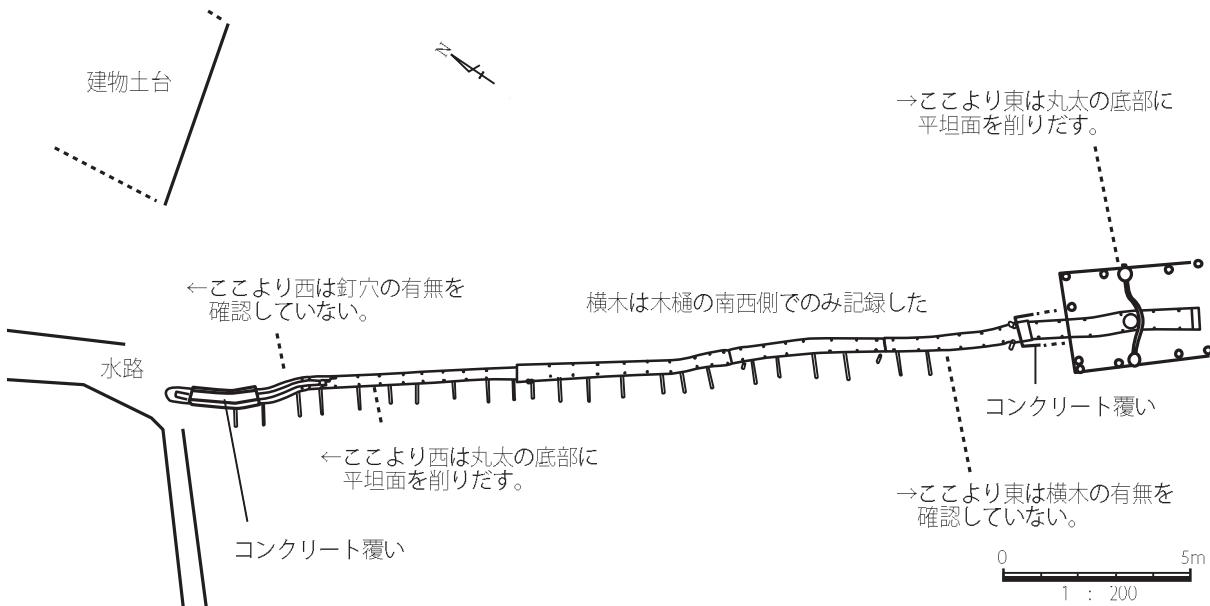


図34 大人池近世木樁平面図

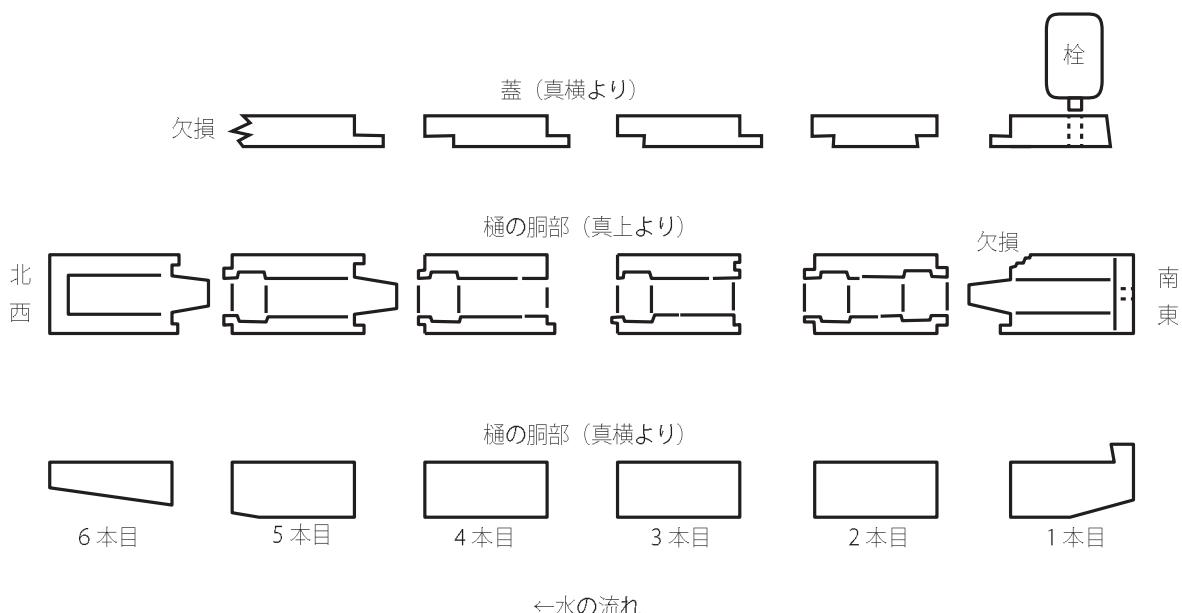


図35 大人池近世木樁の構造模式図



写真45 取水口遠景(6月8日)(北東より)



写真46 木樁検出状況(6月15日)(南より)



写真47 木樁検出状況(6月15日)(西より)



写真48 2本目木樁の北端部(6月15日)
(北西より)



写真49 堤体西側断面(6月27日)(東より)



写真50 4本目木樁の南端部(6月27日)
(南東より)

第4章 まとめ

伊予市内遺跡詳細分布調査は伊予市単独事業として継続しているが、平成30年4月に愛媛県教育委員会から包蔵地調査カード見直しの指摘を受けたため(第1章第1節)平成30年度以降は、包蔵地調査カードの整理による適切な埋蔵文化財保護を念頭において、過去の調査成果をまとめることが最優先課題とした。従って本報告書では、包蔵地調査カードの新規作成や包蔵地範囲の変更に直接関わる調査成果を中心に報告した。本報告書で詳細を記載しなかった調査地については、今後も調査を継続して、改めて報告したい。

平成30年度は、市民や教育機関、市内歴史系団体らと共同で分布調査が実施できた。尾崎では弥生時代から古墳時代にかけてと推測される集落跡が確認されたほか、猿ヶ谷1号墳・猿ヶ谷2号墳採集の銅鏡(付編1)、永木藤繩之森カド遺跡採集の黒曜石剥片と高見Ⅱ遺跡出土の石鏃(付編2)、尾崎の大人池の近世木樋(付編3)について外部専門家に評価・分析していただいた。これらの成果をもとに、埋蔵文化財を国民共有の貴重な財産として保護していきたい。

追記

前号『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書IV』では、令和元年5月1日時点で包蔵地調査カードを作成していない調査地は、仮番号や遺跡名ではない名称で表記しました。令和5年4月1日現在までに、これらの調査地のいくつかで包蔵地調査カードを作成しましたので、お知らせします。

表6 新たに包蔵地調査カードを作成した遺跡

伊予市内遺跡詳細分布調査報告書IV		包蔵地調査カード	
番号	遺跡名	包蔵地名	番号
B	尾崎大人池遺跡	尾崎大人池遺跡	325
	尾崎大人池丘陵の頂部南側		
	尾崎大人池丘陵北西部の墓地		
C	尾崎天神社丘陵東部	尾崎上林遺跡	326
	尾崎天神社丘陵北部		
H	上灘窯跡	上灘窯跡	324
O	高岡集落	高岡遺跡	332
Q	黒瀧城跡	黒瀧城跡	341
R	陣ヶ森砦	陣ヶ森砦跡	343
S	天山下城跡	天山下城跡	323

また、高岡遺跡の表現について、「中世として新たな遺跡」(同報告書：41頁)という書き方にすべきところ、「新たな遺跡」という書き方をしたため、旧石器時代の遺跡として個人が発表していた高岡遺跡の存在を無視しているとのご指摘を頂きました。誤解を招く表現となりましたことをお詫び申し上げます。

最後に、平成23年度に実施した内台遺跡の試掘調査(伊予市教委2013)ですが、調査地点を示した位置図(伊予市教委2013 図21と図44)に誤りがありました。正確な位置は本報告書図7の通りとなりますので、訂正いたします。

参考文献

1. 池尻伸吾2014「上三谷篠田・鶴吉遺跡の調査」『伊豫市の歴史文化』68 伊予市歴史文化の会
2. 石岡ひとみ2012「伊予市三島焼の歴史と製品に関する一考察」『伊豫市の歴史文化』66 伊予市歴史文化の会
3. 石岡ひとみ2015「窯跡資料による伊予市三島焼の製品」『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ－平成25・26年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書－』伊予市教育委員会
4. 伊予市教育委員会1981『猪の窪古墳 伊豫市猪の窪古墳発掘調査報告書』
5. 伊予市教育委員会1991『上吾川・森埋蔵文化財調査報告書 県営圃場整備事業(伊予市西地区・森工区)』
6. 伊予市教育委員会1993『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書 県営圃場整備事業伊予東地区富田池工区』
7. 伊予市教育委員会2005『行道山遺跡』
8. 伊予市教育委員会2013a『伊予小学校遺跡－伊予小学校管理教室棟改築に伴う仮設校舎設置工事にかかる発掘調査報告書－』
9. 伊予市教育委員会2013b『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ－平成23年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書－』
10. 伊予市教育委員会2014『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ－平成24年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書－』
11. 伊予市教育委員会2015『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅲ－平成25・26年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書－』
12. 伊予市教育委員会2019『高見Ⅱ遺跡 東峰遺跡第4地点2次－四国縦貫自動車道における(仮称)中山スマートインターチェンジの建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
13. 伊予市教育委員会2020『伊予市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅳ－平成27・28年度伊予市内遺跡発掘調査等事業報告書－』
14. 伊豫市誌編纂委員会(編)1974『伊豫市誌』伊豫市
15. 伊豫市誌編纂委員会(編)1986『伊豫市誌』伊豫市
16. 伊予市誌編さん会2005『伊予市誌』
17. 伊予市文化財保護審議会(編)2011『いよしの文化財』伊予市教育委員会
18. 伊予市立南山崎小学校1994『ふるさとだいすき』

19. 梅木謙一2000「3 伊予中部地域」菅原康夫・梅木謙一(編)『弥生土器の様式と編年 四国編』木耳社
20. 愛媛県教育委員会1987『愛媛県中世城館跡分布調査報告書』
21. 愛媛県教育委員会2023『愛媛県の近世・近代窯跡－分布調査報告書－』
22. 岡田敏彦2013「伊予市にある古墳のもつ歴史的意義」『伊豫市の歴史文化』67 伊予市歴史文化の会
23. 沖野新一2003『中山の歴史と民俗』
24. 沖野新一2009『双海のあけぼの』唐崎旧石器研究会
25. 沖野新一(編著)2012『赤い旧石器を求めて 肱川流域の謎に家族で迫る』唐崎旧石器研究会
26. 奥野充2019「最近10万年間の広域テフラと火山層序に関する年代研究」『地質学雑誌』125(1)
27. 片上雅仁1986「伊予市の中世城館」『研究紀要』15 愛媛県立伊予農業高等学校
28. 唐崎旧石器資料館 2022a『旧伊予市の考古学的踏査』
29. 唐崎旧石器資料館 2022b『双海の考古学的踏査』
30. 唐崎旧石器資料館 2022c『中山の考古学と民俗』
31. 旧大洲県1872『池記録』県行政資料M02-42 愛媛県立図書館蔵
32. 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2018a『高見Ⅰ遺跡2次』
33. 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2018b『上三谷篠田・鶴吉遺跡』
34. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1987『上三谷古墳群 県営圃場整備事業(伊予東地区上三谷工区)埋蔵文化財調査報告書』
35. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1988『上三谷古墳群Ⅱ 県営圃場整備事業(伊予東地区上三谷工区)埋蔵文化財調査報告書』
36. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1993『県道「伊予-川内線」関連埋蔵文化財調査報告書 平松遺跡 旗屋遺跡Ⅰ』
37. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター1998『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書XⅡ 伊予市編Ⅱ』
38. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2000『新池遺跡 市場南組窯跡 四国縦貫自動車建設に伴う道埋蔵文化財発掘調査報告書XⅣ 伊予市編Ⅲ』
39. 財団法人愛媛県埋蔵文化財センター2001『尼ヶ古城跡・かわらがはな窯跡』
40. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2002『東峰遺跡第2・4地点、高見Ⅰ遺跡 四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書XⅧ 双海町編』
41. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2006『夢原遺跡1・2次 主要地方道松山伊予線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』
42. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2008『猿川西ノ森遺跡 主要地方道北条玉川線整備に伴う埋蔵文化財調査報告書』
43. 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター2011『池田遺跡 一般国道56号伊予インター関連埋蔵文化財調査報告書』
44. 佐礼谷公民館2003『中山町佐礼谷地区の旧道と文化遺産 王環道を辿って』
45. 得居浩司・名本二六雄2012「愛媛県伊予市上三谷採集の有茎尖頭器」『遺跡』46 遺跡発行会
46. 富田尚夫2010「伊予市上三谷出土三角縁獸文帯四神四獸鏡について」『研究紀要』15 愛媛県歴史文化博物館
47. 富田尚夫・吉田広・高山剛2023「西予市宇和町大窪台出土銅矛に関する研究」『研究紀要』28 愛媛県歴史文化博物館
48. 長井數秋1993「原始時代の伊豫市(一)」『伊豫市の歴史文化』28 伊予市歴史文化の会

49. 長井數秋・西岡若水2016『伊予市内の中世様式の石造塔』愛媛考古学研究所
50. 中野良一2014「松山平野出土の瓦器杯」『紀要愛媛』10 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター
51. 中山史談会2020『旧街道は語る－大洲街道－』
52. 中山町教育委員会1965『中山町誌』
53. 中山町誌編纂委員会(編)1996『中山町誌』
54. 兵頭勲2019「縄文時代早期土器から見た高見Ⅱ遺跡の意義」『高見Ⅱ遺跡 東峰遺跡第4地点2次－四国縦貫自動車道における(仮称)中山スマートインターチェンジの建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』伊予市教育委員会
55. 双海町1971『双海町誌』
56. 双海町誌編さん委員会(編)2005『双海町誌 改訂版』
57. 正岡健夫1968「中山町文化財調査」『愛媛の文化』8 愛媛県文化財保護協会
58. 前園実知雄2014「古代史の中の伊予」『伊豫市の歴史文化』68 伊予市歴史文化の会
59. 御荘町教育委員会 1982『平城貝塚』

表7 掲載遺物一覧(土器) (○残存値 □復元値)

図	写真	番号	種別	器種	部位 残存率	法量(cm)	調整 施文		色調	備考
							外面	内面		
4	—	1	須恵器	不明	胴部	器高(6.2)	格子タタキ	同心円タタキ	外：褐灰色 内：灰黄褐色	
		2	瓦質土器	不明	胴部	器高(5.3)	ヨコナデ	ヨコナデ	外：黄灰色 内：黄灰色	
5	—	1	須恵器	不明	胴部	器高(9.3)	平行タタキ	同心円タタキ	外：褐灰色 内：灰白色	天神池 市職員提供資料
		2	須恵器	不明	胴部	器高(7.3)	平行タタキ	同心円タタキ	外：灰色 内：青灰色	天神池北側の湖畔 市職員提供資料
		3	須恵器	坏身	口縁部	器高(2.5)	ヨコナデ	ヨコナデ	外：黄灰色 内：灰色	天神池北側の湖畔 市職員提供資料
		4	須恵器	不明	不明	器高(3.0)	ハケ目	ヨコナデ	内：灰色 外：灰色	天神池北側の湖畔 市職員提供資料
		5	須恵器	不明	胴部	器高(7.1)	タタキか	同心円タタキ	内：灰色 外：褐灰色	天神池 市職員提供資料
		6	須恵器	不明	胴部	器高(9.1)	平行タタキ	同心円タタキ の上からヨコ ナデ	内：灰色 外：灰黄色 胎土：にぶい赤褐色	天神池 市職員提供資料
6	—	1	縄文土器	不明	口縁部	器高(4.1)	楕円文	楕円文 柵状文	外：灰黄褐色 内：にぶい黄褐色	押型文土器(黄島 式)(兵頭2019) 「丘陵」にて採集
		2	瓦器	椀	胴部	器高(2.7)	ナデ 指頭圧痕	ナデの上から ミガキ	外：灰色 内：灰色	「丘陵」にて採集 和泉型か
		3	須恵器	不明	胴部	器高(5.7)	平行タタキの 上からハケ目	同心円タタキ	外：灰色 内：灰色 胎土：灰赤色	
		4	須恵器	不明	胴部	器高(6.1)	格子タタキ	同心円タタキ	外：灰白色 内：灰色	
		5	須恵器	不明	胴部	器高(6.6)	平行タタキの 上からハケ目	同心円タタキ の上からヨコ ナデ	外：黄灰色 内：灰白色	
8	—	1	須恵器	壺	口縁部 ～胴部	口径【22.0】 器高(13.4)	平行タタキの 上からヨコナ デ	同心円タタキ の上からヨコ ナデ	外：灰色 内：灰色	市民提供資料
19	—	1	磁器	鉢(伊予 ボール)	半存	口径18.7 器高9.0	—	—	—	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-5 A区2層
		2	磁器	鉢	半存	口径20.2 器高6.7	型紙染付	型紙染付	—	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-4 A区1層
		3	磁器	碗	半存	器高6.3(破 片部分除く)	型紙染付	型紙染付	—	A-E区一括 ハマ 付着
		4	磁器	碗	半存	口径11.1 器高4.2	型紙染付	型紙染付	—	A-E区一括
		5	磁器	碗	半存	口径【12.6】 器高6.6	型紙染付	型紙染付	—	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-1 A区1層
		6	磁器	碗	半存	口径10.4 器高5.1	銅版染付 クロム	銅版染付 クロム	—	モノハラ一括

図	写真	番号	種別	器種	部位 残存率	法量(cm)	調整 施文		色調	備考
							外面	内面		
—	19	7	磁器	碗	半存	口径【14.6】 器高5.2	型紙染付	型紙染付	—	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-2 A-E区一括
		8	磁器	小皿	完存	口径10.4 器高1.5	銅版染付	銅版染付	—	A区一括
		9	磁器	皿	完存	口径12.6 器高3.2	銅版染付	銅版染付	—	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-3 D-E区一括
		10	磁器	皿	完存	口径13.2 器高2.9	型紙染付	型紙染付	—	A区10層
—	20	11	窯道具	テモノ	半存	直径【30.3】 器高4.2	—	—	浅黄橙色、黒褐色 胎土：橙色	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-8 A区一括
		12	窯道具	焼き台	完存	底面直径 12.0 器高10.6	—	—	浅黄橙色、黒褐色	F区一括
		13	窯道具	ハマ	完存	直径5.6 器高2.2	—	—	浅黄橙色	F区3層
		14	窯道具	足付 ハマ	半存	直径6.3	外底部に 「ヒ」の凸線	—	浅黄橙色	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-6 F区3層
		15	窯道具	ハマ型	完存	直径8.9 器高2.7	—	—	浅黄橙色	愛媛県教育委員会 (2023)図版15-7 F区一括
16	—	1	不明	不明	口縁部	器高(2.6)	ヨコナデ	ヨコナデ	外：橙色 内：にぶい黄橙色	
		2	弥生土器	壺	口縁部	器高(2.1)	ハケ目の上か らヨコナデ	ハケ目の上か らヨコナデ	外：浅黄橙色 内：浅黄橙色	
		3	須恵器	坏蓋	口縁部	器高(3.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	外：灰色 内：灰色 胎土：にぶい赤褐色	古墳時代中期
		4	須恵器	坏蓋	胴部	器高(4.4)	ヘラ削り	ヨコナデ	外：灰黄色 内：灰色 胎土：にぶい赤褐色	古墳時代中期
		5	須恵器	不明	胴部	器高(8.1)	平行タタキの 上からヨコナ デ	同心円タタキ	外：にぶい橙色 内：灰黄色 胎土：にぶい橙色・ 灰色	
		6	不明	甕	胴部	器高(3.2)	タタキか	ハケ目か	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	
16	—	7	不明	甕	口縁部 か	器高(5.6)	摩耗	摩耗	外：橙色 内：浅黄橙色	
		8	弥生土器	甕	胴部	器高(6.0)	タタキ	ハケ目	外：にぶい黄橙色 内：にぶい黄橙色	
		9	不明	不明	胴部	器高(5.3)	ハケ目の上か らヨコナデ	ハケ目	外：にぶい橙色 内：褐灰色	
		10	不明	不明	胴部	器高(4.3)	ハケ目	ハケ目の上か らヨコナデ	外：にぶい赤褐色 内：橙色	

図	写真	番号	種別	器種	部位 残存率	法量(cm)	調整 施文		色調	備考
							外面	内面		
18	-	1	土師器	皿	底部	器高(1.2)	回転糸切痕	摩耗	外: 橙色 内: 橙色	
		2	土師器	皿	底部	器高(1.1)	回転糸切痕	摩耗	外: にぶい赤褐色 内: にぶい赤褐色	
		3	土師器	皿	底部	最大厚(0.8)	回転糸切痕	摩耗	外: にぶい赤褐色 内: にぶい赤褐色	
28	-	1	須恵器	不明	胴部	器高(5.1)	自然釉	同心円タタキ の上からヨコナデ	内: 灰色 外: 灰白色	トレンチ1 V層
		2	須恵器	坏蓋	口縁部	直径(19.0) 器高(0.9)	ヨコナデ	ヨコナデ	外: 灰色 内: 灰色	トレンチ2 IV層 古代
		3	弥生土器	鉢	口縁部	器高(2.0)	不明	不明	内: 橙色 外: 橙色	トレンチ2 V層
		4	不明	不明	胴部	器高(2.7)	摩耗	摩耗	内: 灰白色 外: 浅黄橙色	トレンチ2
31	-	1	弥生土器	鉢	口縁部	器高(7.5)	ハケ目	ハケ目の上からヨコナデ	外: にぶい橙色 内: 黒褐色	排土中より採集
		2	弥生土器	不明	胴部	器高(5.8)	ハケ目	ハケ目	内: 浅黄橙色 外: 浅黄橙色	排土中より採集
		3	弥生土器	不明	胴部	器高(6.6)	ハケ目	ヨコナデ	外: にぶい橙色 内: にぶい橙色	排土中より採集
		4	弥生土器	壺	胴部	器高(8.3)	ハケ目の上からヨコナデ	ハケ目	外: 橙色 内: 黄灰色	SI-1
		5	須恵器	不明	不明	最大厚0.9	ヘラ削り	同心円タタキ の上からヨコナデ	外: 灰色 内: 灰色	SI-2
		6	弥生土器	壺	頸部	凸帯径 【16.6】 器高(3.8)	ハケ目 凸帯に格子目文	ハケ目	外: 橙色 内: 橙色	調査区北部の排土 中より採集
		7	弥生土器	不明	胴部	器高(7.5)	ハケ目	ヨコナデ	内: 橙色 外: 橙色	調査区東部の排土 中より採集
		8	弥生土器	不明	胴部	器高(5.8)	ハケ目の上から一部ヨコナデ	ハケ目の上からヨコナデ	内: にぶい黄橙色 外: にぶい黄橙色	調査区東部の排土 中より採集
		9	弥生土器	不明	胴部	最大厚1.0	ミガキ	ハケ目	内: 褐灰色 外: 明赤褐色	排土中より採集
		10	弥生土器	不明	胴部	器高(6.2)	不明	ハケ目の上から部分的にヨコナデ	内: 灰色 外: 浅黄橙色	調査区東部の排土 中より採集
		11	弥生土器	不明	胴部	器高(5.3)	ハケ目	不明	内: 橙色 外: 橙色	SD-1
		12	弥生土器	不明	胴部	器高(6.4)	ハケ目	ヨコナデ	内: にぶい橙色 外: にぶい橙色	排土中より採集

表8 掲載遺物一覧(石器)

図	写真	番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
—	21	1	石核か	サヌキトイド	5.4	3.5	2.0	44.9	東峰遺跡第4地点2次調査2区 平成29年度採集
13		2	剥片	安山岩	8.5	3.5	1.1	30.1	高見Ⅱ遺跡1a区 平成29年度採集
—		3	剥片	赤色珪質岩	1.9	2.4	0.5	3.0	平成30年度採集
—		4	石核か	赤色珪質岩	4.7	2.3	1.2	15.4	平成30年度採集
—		5	剥片	赤色珪質岩	2.2	3.0	0.9	8.9	平成30年度採集
—	28	4	剥片	サヌキトイド	2.2	1.4	0.4	1.5	
—		5	剥片	赤色珪質岩	1.5	2.1	0.5	1.4	
—		6	剥片	赤色珪質岩	3.2	2.0	1.0	8.3	市職員提供資料
—		7	剥片	赤色珪質岩	1.6	2.7	0.4	1.7	市職員提供資料
—		8	剥片	黒曜石	1.6	0.9	0.6	0.6	産地推定(付編2) 北松浦1群-腰岳-針尾1群
—	33	1	剥片	黒曜石	2.2	0.9	0.3	0.5	推定姫島産
—		2	剥片	赤色珪質岩	1.6	2.2	0.4	1.1	
—		3	剥片	赤色珪質岩	5.1	1.8	1.1	11.0	
—	44	13	礫石器	砂岩	10.0	8.4	2.7	393.6	排土中より採集
—		14	剥片	サヌキトイド	15.8	5.6	1.8	194.3	排土中より採集
32		15	礫石器	緑色片岩	12.1	9.7	3.5	572.8	排土中より採集 両端に敲打痕
—	32	16	礫石器	緑色片岩	9.8	4.3	1.9	125.2	排土中より採集
—		17	礫石器	緑色片岩	11.0	3.4	2.7	132.9	排土中より採集
—		18	凹石・敲石	緑色片岩	(15.2)	6.2	1.8	267.8	調査区西部の法面より採集
—		19	石皿	砂岩	(15.2)	(12.1)	4.1	1,061.5	調査区西部の法面より採集

表9 掲載遺物一覧(金属製品)

図	写真	番号	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	備考
28	—	5	鉄製品	不明	(2.7)	(8.2)	49.1	トレンチ2
33	—	1	鉄製品	和釘	12.7	1.5	48.9	近世木樋に使用
		2	鉄製品	和釘	15.6	1.4	53.2	近世木樋に使用